



2022年度 京都大学野生動物研究センター年報 Wildlife Research Center, Kyoto University



2022 年度 京都大学野生動物研究センター年報

目次

1. 巻頭言 2022	
2. 野生動物研究センター憲章.....	3
3. 組織概要.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
4. 2022 度構成員.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
5. この一年の動き・活動.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
6. 学部・大学院教育.....	エラー! ブックマークが定義されていません。
7. 外部資金.....	3
8. 大型プロジェクト.....	1
9. 動物園・水族館との連携.....	5
10. 国内研究拠点・国内機関との共同研究.....	6
11. 共同研究者訪問履歴表.....	7
12. 研究集会.....	8
13. 海外拠点・海外機関との研究交流等.....	10
14. 海外渡航.....	10
15. 自己点検評価.....	10
16. 2022 度研究業績.....	17
17. 共同利用・共同研究拠点.....	30
18. 野生動物研究センター 企業連携・情報発信事業.....	30

1. 巻頭言 2022

2022年度の野生動物研究センター年報をお届けする。

今年度は新型コロナウイルス感染症の拡大が多少なりとも落ち着きをみせた。とは言え、その影響が完全に払拭されたわけではなく、とくにフィールドワークを主体とする研究活動にはさまざまな制限がかけられた。わたしたちはこのやっかいなウイルスとの共存を探らなければならないだろうし、今後も出現するだろう新たな困難も覚悟しなければならない。そのような中でも、いくつもの研究成果を出せたことは賛辞に値する。学生2人が博士学位を取得したことも素晴らしいことである。彼らには今後の野生動物研究の発展を担ってもらいたい。

2021年度に始まったロシアによるウクライナ侵攻は、1年が過ぎても収束する気配が見られず、その影響は食糧やエネルギーといった商品市況の高騰、貿易の悪化、世界経済への影響など、わたしたちの日常生活にも大きな打撃を与えている。一方で、地球温暖化、海洋汚染、水質汚染、大気汚染、森林破壊といった環境問題は異常気象を引き起こし、わたしたち自身はもちろん、地球上に生息するあらゆる生命の命を脅かしている。わたしたちが研究対象とする野生動物の生息状況は、近い将来、本来とはまったく異なる形に変わってしまうことも否めないだろう。トーマス・ハクスリーが説いた「自然における人間の位置」を再考し、わたしたちは人間の存在意義と活動そのものについて、いまいちど深く見つめ直す必要がある。

実は、私は前年度の年報において「2022年度末に定年を迎える私にとっては、・・・」と書いている。確かに定年を迎えはしたのだが、何の因果か特任教授として引き続き当センターのセンター長を仰せつかった。多少なりともんびりした引退後を期待していたのだが、もう少し野生動物学の礎の確立に尽力せよ、ということなのだろう。上述したように、わたしたちをとりまく環境は益々厳しさを増している。しかし、だからこそ自然を対象にした研究を止めてはいけない。フィールドワークからラボワークまで、さらには人文社会学をも視野に入れた学際的研究の扉を閉ざしてはならない。国内で唯一の野生動物研究拠点であることを重く受け止め、独創的かつ先駆的な教育研究の発展に力を入れなければならない。みなさまからのさらなるご指導・ご鞭撻をお願いしたい。

最後に、今年度も残すところ2ヶ月足らずになった2月初旬、非常に残念な事故が起こってしまった。当センターに所属する修士課程の学生が、フィールドワーク中に崖から滑落して命を落とした。ご家族の悲しみはもちろんのこと、同じ部局に所属する仲間を失ったわたしたちの喪失感は計り知れない。ここに故人とご遺族に対して心から哀悼の意を捧げたい。そして、二度とこのような悲惨な事故を起こさないことを誓うとともに、フィールドワークにおける十分すぎる安全管理対策を講じることを肝に銘じたい。

京都大学野生動物研究センター
センター長 伊谷 原一

2. 野生動物研究センター憲章

京都大学野生動物研究センターは、野生動物に関する教育研究をおこない、地球社会の調和ある共存に貢献することを目的とする。その具体的な課題は次の3点に要約される。第1に、絶滅の危惧される野生動物を対象とした基礎研究を通じて、その自然の生息地でのくらしを守り、飼育下での健康と長寿をはかるとともに、人間の本性についての理解を深める研究をおこなう。第2に、フィールドワークとライフサイエンス等の多様な研究を統合して新たな学問領域を創生し、人間とそれ以外の生命の共生のための国際的研究を推進する。第3に、地域動物園や水族館等との協力により、実感を基盤とした環境教育を通じて、人間を含めた自然のあり方についての深い理解を次世代に伝える。

京都大学野生動物研究センター設置準備委員会（平成20年2月5日制定）

3. 組織概要

センターの研究は、野生動物のこころ、からだ、くらし、ゲノム、そして健康長寿の探究をめざします。そのために、下記のような4つの研究部門で構成されています。さらに1つの寄附部門、国内に3つの研究拠点、海外に7つのフィールドワークの研究拠点があります。

1. 研究部門

陸圏保全、水圏保全、動物福祉、分子保全

2. 寄附研究部門

福祉長寿研究部門（～2022年6月30日）

2. 国内の研究拠点

幸島観察所、屋久島観察所、熊本サンクチュアリ

3. 海外の研究拠点

タンザニアのキゴマ、アルーシャ及びダルエスサラーム、マレーシアのダナムバレー、ガーナのアクラ、コンゴ民主共和国のバリ、ポルトガルのヴィアナ・ド・カステロ

なお、センターの運営は協議員会でおこない、諮問機関として連携協議会があります。

4. 2022年度構成員

4.1. 教員

センター長・教授：伊谷 原一（いだに げんいち）

教授：村山 美穂（むらやま みほ）

教授：平田 聡（ひらた さとし）

教授：三谷 曜子（みたに ようこ）

教授：古市 剛史（ふるいち たけし）（2022年4月1日～）

准教授：杉浦 秀樹（すぎうら ひでき）

准教授：Michael Huffman（まいく はふまん）（2022年4月1日～）

准教授：Andrew MacIntosh（あんどりゅー まつきんとつしゅ）（2022年4月1日～）

助教：木下 こづえ（きのした こづえ）

助教：徳山 奈帆子（とくやま なほこ）（2022年4月1日～）

助教：橋本 千絵（はしもと ちえ）（2022年4月1日～）

特定准教授（寄附研究部門）：森村 成樹（もりむら なるき）

特定准教授（白眉プロジェクト）：相馬 拓也（そうま たくや）

特定助教：藤原 摩耶子（ふじはら まやこ）（2022年4月1日～）

4.2. 兼任教員

今井 啓雄（いまい ひろお） 京都大学ヒト行動進化研究センター・教授

山本 真也（やまもと しんや） 京都大学高等研究院・准教授

山越 言（やまごえ げん） 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・教授

半谷五郎 (はんやごろう) 京都大学ヒト行動進化研究センター・准教授
中村美知夫 (いまい ひろお) 京都大学理学研究科・准教授
木村里子 (きむらさとこ) 京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授
齋藤美保 (さいとうみほ) 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科・助教
遠藤秀紀 (えんどうひでのり) 東京大学総合研究博物館・教授
藤田 志歩 (ふじた しほ) 鹿児島大学共通教育センター・准教授
松林尚志 (まつばやしなおし) 東京農業大学農学部・教授

4.3. 特任教員

特任教授：幸島司郎 (こうしま しろう)
特任教授：田中正之 (たなか まさゆき) (京都市文化市民局)
特任教授：西田 睦 (にしだ むつみ) (琉球大学)
特任教授：阿形 清和 (あがた きよかず) (学習院大学)
特任教授：Fred BERCOVITCH (ふれっど べるこびっち)
特任教授：Raman SUKUMAR (らまん すくらーむ) (インド科学大学)
特任教授：Han Ning (はん にん) (昆明理工大学)
特任教授：森岡 一 (もりおか はじめ)
特任教授：辰野 勇 (たつの いさむ) (株式会社モンベル会長)
特任教授：Hill. David Anhthony (ひる でいびっど) (インド科学大学)
特任教授：Robert OGDEN (ろばーと ぼーでん)
特任教授：Jeams. R. ANDERSON (じむ あんだーそん)
特任准教授：杉山 茂 (すぎやま しげる) (静岡大学)
特任准教授：中村 美穂 (なかむら みほ)
特任准教授：齋藤 亜矢 (さいとう あや) (京都造形芸術大学)
特任准教授：川上 文人 (かわかみ ふみと) (中部大学)
特任講師：大橋 岳 (おおはし かく) (中部大学)

4.4. 事務職員・技術職員・非常勤職員等

事務長：川邊 博之 (かわべ ひろゆき)
事務掛長：山中 啓太郎 (やまなか けいたろう)
事務掛員：小西 昌宏 (こにし まさひろ)
技術職員：鈴木 崇文 (すずむら たかふみ) (幸島観察所)
技術職員：野上 悦子 (のがみ えつこ) (熊本サンクチュアリ)
支援職員：高橋 佐和子 (たかはし さわこ)
教務補佐員：小林 宏美 (こばやし ひろみ)
教務補佐員：杉谷 美紀 (すぎたに みき)
事務補佐員：栗野 紋子 (くりの あやこ)
事務補佐員：栗原 智子 (くりはら ともこ)
事務補佐員：前川 洋子 (まえかわ ようこ)
技術補佐員：松崎 里絵子 (まつざき りえこ) (～2022年12月31日)
技術補佐員：橋本 大樹 (はしもと ひろき)
技能補佐員：渡邊 雅史 (わたなべ まさふみ) (熊本サンクチュアリ) (～2023年2月28日)
技能補佐員：小松 優人 (こまつゆうと) (熊本サンクチュアリ)
教務補佐員：上坂 博介 (うえさか ひろすけ) (熊本サンクチュアリ)
事務補佐員：那須 和代 (なす かずよ) (熊本サンクチュアリ)
技術補佐員：川上 博加 (かわかみ ひろか) (熊本サンクチュアリ) (2022年7月19日～)
技能補佐員：杉 美智子 (すぎ みちこ) (熊本サンクチュアリ) (2023年1月15日～)
技能補佐員：鹿毛 涉之介 (かげ しょうのすけ) (熊本サンクチュアリ) (2023年3月1日～)

事務補佐員：大森 佳保里 (おおもり かほり)(犬山キャンパス)(2022年5月9日～)
事務補佐員：角谷 千代子 (かくたに ちよこ)(犬山キャンパス)(2022年5月9日～)
技術補佐員：高野 かおり (たかの かおり)(犬山キャンパス)(2022年9月1日～)

4.5. 研究員等

特定研究員：新宅 勇太 (しんたく ゆうた)
特定研究員：岡部 直樹 (おかべ なおき)
特定研究員：廣澤 麻里 (ひろさわ まり)
特定研究員：綿貫 宏史郎 (わたぬき こうしろう)
特定研究員：竹元 博幸 (たけもと ひろゆき)
特定研究員：平田 加奈子 (ひらた かなこ)
特定研究員：Kristin Ann Havercamp (くりすていん はーばー きゃんぷ) (2022年4月16日～)
特任研究員：岸田 拓士 (きしだ たくし)
特任研究員：幸島 和子 (こうしま かずこ)
特任研究員：伊藤 英之 (いとう ひでゆき)
特任研究員：村山 裕一 (むらやま ゆういち)
特任研究員：山梨 裕美 (やまなし ゆみ)
特任研究員：櫻庭 陽子 (さくらば ようこ)
特任研究員：滝澤 玲子 (たきざわ れいこ)
特任研究員：Christopher ADENYO (くりすとふあー あでによ)
特任研究員：田和 優子 (たわ ゆうこ)
特任研究員：菊池 夢美 (きくち むみ)
特任研究員：中林 雅 (なかばやし みやび)
特任研究員：荒堀 みのり (あらほり みのり)
特任研究員：佐藤 悠 (さとう ゆう)
特任研究員：持田 浩治 (もちだ こうじ)
特任研究員：池田 成秀 (いけだ なりひで)
特任研究員：村松 大輔 (むらまつ だいすけ)
特任研究員：原澤 牧子 (はらさわ まきこ)
特任研究員：津田 晶子 (つだ しょうこ)
特任研究員：澤栗 秀太 (さわくり しゅうた)
特任研究員：井上 創太 (いのうえ そうた)
特任研究員：キム・ミーヨン (きむ みーよん)
特任研究員：遠藤 良典 (えんどう よしのり)
特任研究員：福島 誠子 (ふくしま せいこ)
特任研究員：田島 知之 (たじま ともゆき)
特任研究員：鶴殿 俊史 (うどの としふみ)(熊本サンクチュアリ)
特任研究員：森 裕介 (もり ゆうすけ)(熊本サンクチュアリ)
特任研究員：工藤 宏美 (くどう ひろみ)
研究員(非常勤)：毛利 恵子(もうり けいこ)

4.6. 大学院博士後期課程

Pandora Francisca Costa Barão PINTO (ぱんどら ふらんしす かかすた ぴんと) ※PWSリーディング大学院履修生
Elio Borghezani De Almeida (えりお ぼるげさん)
Lim Qi Luan ※PWSリーディング大学院履修生
前田 玉青 (まえだ たまお) ※PWSリーディング大学院履修生
李 怜柱 ※PWSリーディング大学院履修生
内藤 アンネグレート 素 ※PWSリーディング大学院履修生
義村 弘仁 (よしむら ひろと) ※PWSリーディング大学院履修生
James Gerard Brooks ※PWSリーディング大学院履修生

大西 絵奈 (おおにし えな) ※PWSリーディング大学院履修生
齊 恵元 (さい けいげん)
服部 円 (はっとり まどか)
Piao Yige ※PWSリーディング大学院履修生
Palacino Gonzalez, Gema ※PWSリーディング大学院履修生
Ana Sofia Penteado Vilela
善本 智佳 (ぜんもと ちか) ※PWSリーディング大学院履修生

4.7. 大学院修士課程

杉元 拓斗 (すぎもと たくと)
板原 彰宏 (いたはら あきひろ)
小林 知奈 (こばやし ちな)
栗山 侑子 (くりやま ゆうこ) ※PWSリーディング大学院履修生
鈴木 瑛之 (すずき あきゆき)
鈴木 彩月 (すずき さつき)
田中 千聖 (たなか ちさと) ※PWSリーディング大学院履修生
Lee Sok Hwan ※PWSリーディング大学院履修生
新井 花奈 (あらい かな)
岡本 優芽 (おかもと ゆめ)
八鍬 聖 (やくわ さとる)
Magnus Olsen Monge

4.8. 特別研究学生

河合 真美 (かわい まみ) 北海道大学大学院環境科学院 修士課程
櫻木 雄太 (さくらぎ ゆうた) 北海道大学大学院環境科学院 博士課程
辻井 浩希 (つじい ひろき) 北海道大学大学院環境科学院 博士課程
小川 萌日香 (おがわ もにか) 北海道大学大学院環境科学院 博士課程
古巻 史穂 (ふるまき しほ) 北海道大学大学院環境科学院 博士課程

※期間が書いていない場合は2022年4月1日～2023年3月31日の在籍

4.9. 共同利用・共同研究拠点

共同利用・共同研究拠点運営委員

村山美穂(京都大学野生動物研究センター・教授)
朝倉彰(京都大学フィールド科学研究センター・教授)
坂本龍太(京都大学東南アジア地域研究研究所・准教授)
中野伸一(京大大学生態学研究センター・センター長・教授)
亀崎直樹(岡山理科大学生物地球学部・教授)
牛田一成(中部大学創発学術院・応用生物学部・教授)
栗田正徳(名古屋港水族館・館長)
黒邊雅実(名古屋市東山動物園・園長)
坂本英房(京都市動物園・園長)
横山真弓(兵庫県立大学自然・環境科学研究所・教授)

共同利用・共同研究拠点計画委員会

清野未恵子(神戸大学大学院人間発達環境学研究科・准教授)
山梨裕美(京都市動物園生き物学び研究センター・主席研究員)
井上英治(東邦大学理学部生物学科・准教授)2021年10月より
杉浦秀樹(京都大学野生動物研究センター・准教授)
木下こづえ(京都大学野生動物研究センター・助教)
三谷曜子(京都大学野生動物研究センター・教授)

5. この一年の動き・活動

2022年

- 4月13日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 5月18日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 6月16日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 7月13日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 7月 9日：熊本サンクチュアリ運営委員会（オンライン開催）
- 9月 ：野生動物研究センター連携協議会（メール審議）
- 10月12日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 11月 9日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 11月11日：野生動物研究センター連携協議会，野生動物研究センター共同利用・共同研究拠点運営委員会（於：関田南研究棟地階会議室）
- 12月17日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）

2023年

- 1月18日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 1月28日：熊本サンクチュアリ運営委員会（オンライン開催）
- 2月15日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）
- 3月15日：野生動物研究センター協議員会，霊長類学・野生動物系教員会議（於：関田南研究棟地階会議室）

6. 学部・大学院教育

学部生向け講義

全学共通科目

- 野生動物学入門（自然科学科目群・前期）
- Comparative Cognition-E2（自然科学科目群・前期集中）

ILAS セミナー

- 遺伝子からみる野生動物（少人数教育科目群・前期集中）
- 霊長類の進化とヒトのこれから（少人数教育科目群・前期）

理学部科目

- 保全生物学（前期）

大学院生向け講義

- 生物科学専攻インターラボ（前期集中）
- 野外生物学分析実習 A（前期集中）
- 野外生物学実習 B（後期集中）
- 野生動物概論（前期集中）
- 野生動物・行動生態基礎論（前期集中）
- 野生動物・動物園科学基礎論 A（前期集中）
- 野生動物・動物園科学基礎論 B（後期集中）
- 野生動物・ゲノム科学基礎論（前期集中）

野生動物特論（後期集中）
 野生動物・行動生態野外実習（前期集中）
 基礎フィールドワーク実習無雪期（前期集中, 後期集中）
 基礎フィールドワーク実習積雪期（後期集中）
 動物福祉実習（後期集中）
 野生動物ゼミナール A（前期）
 野生動物ゼミナール B（後期）
 野生動物ゼミナール C（前期）
 野生動物ゼミナール D（後期）
 霊長類学・野生動物特殊研究 A（前期）
 霊長類学・野生動物特殊研究 B（後期）
 霊長類学・野生動物特殊研究 C（前期）
 霊長類学・野生動物特殊研究 D（後期）

博士学位論文（京都大学大学院理学研究科博士後期課程）

Tamao Maeda「Drone observation reveals a multilevel society of feral horse」
 Qi L Lim「Genetic Assessment of the Malayan Tapir (Tapirus indicus) for Its Conservation Implications」

修士論文（京都大学大学院理学研究科修士課程）

Sok Hwan Lee「プレステイジー型社会的地位の進化: チンパンジーにおける技能と地位の関連」
 新井花奈「DNA メチル化を指標としたアジアゾウの年齢推定」
 栗山侑子「イリオモテヤマネコにおける糞中ステロイドホルモン濃度の測定と地点比較」
 杉元拓斗「ウマにおけるヒトに対する第三者評価」
 田中千聖「ツシマヤマネコにおける飼育環境変化と糞中ストレスホルモン濃度および行動変化との関係」
 板原彰宏「モーションキャプチャ技術で明らかにするハシブトガラスの注視方法」

7. 外部資金

7.1. 科学研究費補助金

受入者	代表/ 分担	種別	研究課題名	金額（千円: 直接/間接）
平田 聡	代表	新学術領域	時間の獲得の個体発生と系統発生	30,300/ 9,090
村山 美穂	代表	新学術領域	家畜化によるヒトと動物の関係変容に伴う性格関係 遺伝子の変化	1,900/570
相馬 拓也	代表	新学術領域	草原世界の伝統知に秘められた人類の生存戦略の 探索	1,800/540
村山 美穂	代表	基盤 A	ゲノム・細胞情報に基づく国内希少動物の繁殖促進 戦略	10,400/ 3,120
古市 剛史	代表	基盤 B	霊長類のメスの集団間移籍の要因: 類人猿のメスの 身体的・性的発達に着目して	5,900/ 1,770
三谷 曜子	代表	基盤 B	知床周辺海域における海洋高次捕食者のホットスポ ット形成機構の解明	1,600/480
Andrew MacIntosh	代表	基盤 B	Testing dilution versus amplification effects of primate biodiversity on parasite biodiversity	3,200/960
木下 こづ え	代表	基盤 B	希少ネコ科動物における繁殖率と年齢構成の情報 に基づいた絶滅リスクの比較定量化	2,500/750
相馬 拓也	代表	基盤 B	シルクロードの伝統知から探る遊牧民の草原適応術	2,000/600

			とレジリエンスの学知融合研究	
橋本 千絵	代表	国際共同研究強化 B	ヒト科における閉経の進化:野生類人猿の老齡メスの性ホルモン動態と繁殖戦略の研究	2,800/840
木下 こづえ	代表	国際共同研究強化 B	オーストラリアと日本の固有哺乳類のクロス型域内・域外保全研究	2,900/870
澤田 晶子	代表	基盤 C	サルはにおいて毒キノコを判別するのか:忌避を誘導する揮発性物質の特定	1,000/300
櫻庭 陽子	代表	若手	霊長類における身体障害個体に対する情動と社会関係:身体的ハンデは社会的ハンデ?	700/210
前田 玉青	代表	特別研究員奨励費	野生ウマにみられる重層社会:群れの集結と規則的空間配置の成立メカニズム	900
Borghazan ELIO	代表	特別研究員奨励費	アマゾン川に生息する魚類における、水の色が視覚と配偶者選択の進化に与える影響	700
LIM QI LUAN	代表	特別研究員奨励費	マレーバクは絶滅の夢を食うか:遺伝解析による保全の試み	700
義村 弘仁	代表	特別研究員奨励費	キルギス共和国の高山生態系における哺乳類の植物利用戦略の解明	700
内藤 アンネグレート素	代表	特別研究員奨励費	絶滅危惧種イヌワシとクマタカにおける「つがいの相性」遺伝的基盤と繁殖成功率	1,200
柴田 翔平	代表	特別研究員奨励費	ヒト科におけるオスの共存メカニズムの進化:Pan 属 2種の比較	700
木下こづえ (POKHAREL Sanjeeta Sharma)	代表	外国人特別研究員奨励費	尻尾の毛中コルチゾール・安定同位体分析からゾウの過去の健康状態を読み解く	1,300
三谷 曜子	分担	基盤 S	海氷が導く熱・塩・物質のグローバル輸送	6,000/1,800
三谷 曜子	分担	基盤 A	海洋溶存酸素濃度の変動が中深層生態系高次捕食動物に与える影響の評価	300/90
伊谷 原一	分担	基盤 A	戦争と協力の進化:集団間競争と集団内協力の比較認知科学的検討	500/150
平田 聡	分担	基盤 A	戦争と協力の進化:集団間競争と集団内協力の比較認知科学的検討	500/150
徳山 奈帆子	分担	基盤 A	戦争と協力の進化:集団間競争と集団内協力の比較認知科学的検討	500/150
古市 剛史	分担	基盤 A	学際的統合研究によるアフリカにおける人と動物の相互関係の解明とその実践への応用	2,200/660
徳山 奈帆子	分担	基盤 A	学際的統合研究によるアフリカにおける人と動物の相互関係の解明とその実践への応用	1,200/360
新宅 勇太	分担	基盤 A	他者から学ぶ・他者と学ぶ 問題解決の創発と伝播に関する社会学習の比較認知科学研究	600/180
相馬 拓也	分担	基盤 A	ヒマラヤの人と自然の連環:東西3地域の比較	540/162
村山 美穂	分担	基盤 B	「見つめる目」を受け取る個性と脳多様性	100/30
村山 美穂	分担	基盤 B	頭足類の「個のない社会」の形成維持機構に関する鳥類・哺乳類との比較研究	70/21
三谷 曜子	分担	基盤 B	根室海峡におけるシャチの若齢個体加入状況に関する研究	60/18
村山 美穂	分担	国際共同研究強化 B	巨大齧歯類の家畜化によるアフリカ食糧問題への貢献と新規実験動物の開発	600/180
伊谷 原一	分担	挑戦的研究	新しい野生ボノゴ調査地の開拓:サバンナー森林混	875/262

		(萌芽)	交環境におけるボノボ社会の解明	
新宅 勇太	分担	挑戦的研究 (萌芽)	新しい野生ボノボ調査地の開拓:サバンナー森林混 交環境におけるボノボ社会の解明	375/112

7.2. その他の研究費

受入者	研究課題	種別	金額 (千円)
野生動物研究センター	沿岸環境課題 北極海における沿岸環境の変化とその社会影響	国立大学法人北海道大学	5,046
野生動物研究センター	比較ゲノム解析情報にもとづく高次捕食動物の保全を目指した国際共同研究	JSPS 二国間交流事業(オープンパートナーシップ)	1,900
野生動物研究センター	分断された絶滅危惧種チンパンジーの生息地をつなぐ「緑の回廊」植林活動とドローンを用いた広域野火管理技術の確立	三井物産環境基金	2,400
野生動物研究センター	世界自然遺産・知床をはじめとするオホーツク海南部海域の海氷・海洋変動予測と海洋生態系への気候変動リスク評価	国立大学法人北海道大学	1,760
野生動物研究センター	生殖細胞を活用した絶滅危惧野生動物の生息域外保	環境再生保全機構	17,960
野生動物研究センター	脳コネクトームと社会行動の遺伝基盤の解析		5,000
野生動物研究センター	希少鳥類保全のための配偶子保存技術の開発		920
野生動物研究センター	ミンククジラ2系群のヒゲ板に含まれている安定同位体比を用いた摂餌履歴の推定	日本鯨類研究所	3,000
野生動物研究センター	こころの豊かさに関する総合的研究	日本たばこ株式会社	1,000
野生動物研究センター	令和4年度有害生物(オットセイ)生態把握調査委託事業	北海道立総合研究機構	4,071
野生動物研究センター	GPSを用いた方牧牛行動管理システムの実証研究		340

7.3. 寄附金

受入者	寄附の目的	種別	金額 (千円)
福祉長寿研究部門	チンパンジーの福祉と長寿に関する研究	三和化学研究所寄附金	42,938
三谷 曜子	SPLASH-2『ザトウクジラプロジェクト研究推進』		269
M. A. Huffman	A tail of two species— behavior, phenotype, and genetics of the Sri Lankan langurs	京都大学教育研究振興財団	1,000
伊谷 原一	霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディン	河合 江理子	754

	グ大学院のため		
三谷 曜子	海中林における高次捕食者、ラッコとヒトは共存できるか:ラッコが沿岸生態系に与える影響	(財)旭硝子財団	4,000
古市 剛志	野生ボノボ保護区におけるコミュニティプロジェクト	霊長類研究所から移管	200
古市 剛志	LEAKEY財団 R3長期研究(コンゴ民主共和国ルオー学術保護区ワンバ地区におけるボノボの長期研究)	霊長類研究所から移管	1,609
橋本 千絵	LEAKEY財団 R3長期研究(ウガンダ共和国カリンズ森林保護区におけるチンパンジーの長期研究)	霊長類研究所から移管	2,109
伊谷 原一	富士通株式会社「知能とはなにか」についての解明のための研究助成 湯本貴和	霊長類研究所から移管	1,467
伊谷 原一	ワイルドライフサイエンス(名古屋鉄道) ワイルドライフサイエンス(野生動物管理学)の研究・教育・社会貢献の推進のため	霊長類研究所から移管	131,446
伊谷 原一	チンパンジー(林原)	霊長類研究所から移管	117,239
徳山 奈帆子	くすのき・125(徳山奈帆子)ヒトと動物の共存する未来のために	霊長類研究所から移管	4,577
伊谷 原一	熊本サンクチュアリにおける獣医学診断装置整備(クラウドファンディング)	クラウドファンディング	7,492
伊谷 原一	熊本サンクチュアリのチンパンジー肝炎治療薬	クラウドファンディング	20,095

8. 大型プロジェクト

8.1. ナショナルバイオリソースプロジェクト(GAIN)

GAIN: 大型類人猿情報ネットワークの展開

事業名称「情報発信体制の整備とプロジェクトの総合的推進」(大型類人猿情報ネットワークの展開, 英文名称 Great Ape Information Network, 略称 GAIN, 事業代表者:伊谷原一)は, 文部科学省の主導によるナショナルバイオリソースプロジェクト(NBRP)の一環として平成 14 年度に発足した。令和 4 年度より第 5 期となり, その 1 年目(通算 21 年目)となった。飼育施設と研究者を結ぶネットワークや個体情報データベースのさらなる充実をめざしている。令和 2 年度より, 野生動物研究センターを経理部局としている。野生動物研究センターとヒト行動進化研究センターの両部局の共同運営事業と位置付けており, 綿貫宏史朗(野生動物研究センター特定研究員)と松崎里絵子(野生動物研究センター技能補佐員;令和 4 年 12 月 31 日まで)・杉美智子(同;令和 5 年 1 月 16 日~3 月 31 日)の 3 名の職員が実務にあたった。また親事業である「情報発信体制の整備とプロジェクトの総合的推進」を統括する国立遺伝学研究所(代表機関課題管理者:川本祥子)から厚いご支援をいただいた。令和 4 年度事業としては, 従来と同様に, 死亡や出生に応じて迅速にデータベースを更新することができた。

令和 5 年 3 月 31 日現在で, チンパンジー 298 個体(45 施設), ボノボ 6 個体(1 施設), ゴリラ 20 個体(6 施設), オランウータン 41 個体(18 施設), テナガザル類 163 個体(43 施設)が国内で飼育されている。個体ごとの生年月日や家系情報に加えて, DNA 情報・行動情報についても整備をすすめた。すでに死亡した個体も含め, チンパンジー 1,083 個体, ボノボ 9 個体, ゴリラ 123 個体, オランウータン 257 個体, テナガザル 614 個体分, 総計 2,086 個体(うち現存個体 528 個体)分の情報データベースとなった(令和 3 年度末比+6 個体)。また, 死亡個体由来の試料(ヒト行動進化研究センター・資料委員会が管理)について, 野生動物研究センターの共同利用・共同研究拠点制度にのっとり配布を進めた。令和 4 年度中に国内で死亡した類人猿 15 個体中 8 個体および過年度に死亡し保存されていた 1 個体, 計 9 個体分の遺体由来試料について GAIN を通じヒト行動進化研究センター・資料委員会で譲受した。GAIN を経由した資試料の利用または情報の参照により令和 4 年度中に発表された学術論文等は 11 件(うち国際誌(英文)9 件, 国内誌(和文)2 件)であった。さらに, 本事業のデータベースは世界的にも貴重な情報の源であることに鑑み, 英語版 Web サイトもリアルタイムで更新し, 世界に向けて日本の大型類人猿の情報を発信した。(綿貫宏史朗)

8.3. 文部科学省博士課程教育リーディングプログラム(オンリーワン型)

概要

平成 25 年 10 月 1 日に採択され発足した当プログラムは, 日本の他の大学に類例のない, フィールドワークを基礎とするプログラムである。学内の研究者に加えて, 環境省職員, 外交官, 地域行政, 法曹, 国際 NGO, 博物館関係者などからなるプログラム分担者をそろえ, 3 つのキャリアパスを明確に意識した体制を構築した。

採択当初から 3 年次編入制度を導入していることにより, 2022 年度は 5 学年 32 名の履修生がそろい, 4 名の仮修了生および 2 名の修了生を輩出した。

① プログラムの実施・運営:

2022 年度は 7 実習「幸島実習」「野外生物学実習」「野外生物学分析実習」「比較認知科学実習/動物福祉実習」「基礎フィールドワーク実習(無雪期・積雪期)」「動物園・博物館実習」「自主フィールドワーク実習」を選択必修に設定した。本来, 実習は年に 2 回ずつ実施する予定であったが, コロナの影響によりフィールドワーク実習(無雪期)(2022/7/19-21)、行動生態実習(2022/5/9-5/15)、野外生物学分析実習(2022/11/28-11/30)、野外生物学実習(2022/1/28-2/3,)しか開催できなかった。

- 行動生態実習: 日本の霊長類学の発祥の地である宮崎県幸島において, 天然記念物である幸島の野生ニホンザルを観察して, 糞の採集から食物となった植物を同定するなど, 各自がくふうしたテーマで研究をおこない, 野外研究の基礎を学ぶ。
- 野外生物学実習: 屋久島観察所などを利用して野外でフィールドワークを行う。この実習では, 新しい研究テーマにも取り組み, 探索的な研究に挑戦する。参加者は積極的に調査に参加することで, 野外調査の経験を積む。

- 野外生物学分析実習：近年の野外研究では、分子生物学的な手法や、自動撮影カメラや無人航空機など機材が用いられる。野外研究での応用を視野に入れた、遺伝学や生理学の実習を行ったり、野外実習等で収集したデータを解析したりすることで、野外調査における分析の経験を積む。
- 比較認知科学実習：霊長類研究所で、チンパンジーの認知機能の実験研究の現場に参加して、チンパンジーという「進化の隣人」を深く知るとともに、そうした日々の体験を通して「研究」という営為を理解する。研究する側の日常と、研究される側の日常の姿を見せたい。またこれに加えて、霊長類とは異なる環境に適応してきた有蹄類であるウマについても、その行動観察などの実習をおこなう。
- 動物福祉実習：野生動物研究センター・熊本サルクチュアリにて、飼育下の動物の動物福祉について、講義と実習によって学ぶ。動物福祉の向上を図る実践的取組としての環境エンリッチメント、採食エンリッチメント、認知的エンリッチメント、およびこれらの実践と評価のために必要な行動観察や比較認知科学研究の手法について、実習によって習得する。
- 野生動物・動物園科学基礎論：日本モンキーセンターにおいて、PWS 教員・キュレーター・飼育技術員・獣医師を講師としたレクチャーを受け、現場で飼育実習を行い、教育普及活動にも参加する。PWS の3つの出口のうちのひとつである「博士学芸員」の仕事について学ぶとともに、霊長類及びワイルドライフサイエンスの環境教育の実践に触れる。
- 基礎フィールドワーク実習(無雪期・積雪期)：国内のフィールドにおいて、無雪期と積雪期に生物観察や登山、夜間のビバーク体験(戸外での緊急露営)など、フィールドワークの基礎となるサバイバル技術を学ぶ。
- 自主フィールドワーク実習：自主企画の海外研修を行うことで、履修生の自発的なプランニング能力の向上を図り、出口となる保全の専門家や、キュレーターや、アウトリーチ活動の実践者の育成につなげる。

② 連携体制の維持・強化：

履修生を広く深く支援する教育研究体制を強化した。プログラムの意思決定は、学内分担者の全員からなる月例の協議員会で、その中枢としてヘッドクォーター(HQ)制度をとった。コーディネーターを含む6名のHQがいて、諸事の運営を審議する。特定教員3名をはじめ、英語に堪能な事務職員を配置し、協力して履修生をサポートした。プログラムの方針・運営状況・カリキュラム・成果・履修生の動向などについて、対内外の情報・広報は、すべて一元的にHP(<http://www.wildlife-science.org/>)に集約して共有した。The International Symposium on Primatology and Wildlife Science(2021/9/29-30、2022/3/7-8)で、履修生や外国人協力者(IC)も含めた90名超のプログラム関係者が一堂に会することで、プログラムの方向性や進捗状況を確認し、連携強化を図った。なお、2022年度の国際シンポジウムはコロナ禍の影響もあり開催しなかった。

学外との連携について、プログラムの「実践の場」として、19の動物園・水族館・博物館と連携協定を結んでいるが、特に公益財団法人日本モンキーセンター(以下JMC)や京都市動物園では、履修生によるアウトリーチ活動を可能な範囲で実施した。特に、高大連携事業に協力し、JMCや京都市動物園等を適宜活用した。JMC発行の季刊誌「モンキー」の刊行については、本プログラムが全面的に協力し、プログラムの活動PRの媒体となっている。国内ワイルドライフサイエンスとの連携も継続しており、特に屋久島は実習で訪れるなかで「屋久島学ソサエティ(<http://yakushimagakusociety.hateblo.jp/>)」を中核とした地域住民との協働が緊密である。

③ キャリアパスを見据えた履修生の自主性の涵養と支援：

必修の「自主フィールドワーク実習」では、履修生が自主企画の海外研修をおこなうことで、自発的なプランニング能力の向上を図り、出口となる保全の専門家や、キュレーターや、アウトリーチ活動の実践者の育成につなげている。個人的なフィールドワークに限らず、履修生のイニシアチブによる自主企画の取組も奨励し、運営・実践能力の涵養を図った。**優秀な履修生の継続的な獲得と支援：**

3年次編入制度、春秋の国際入試を実施し、秋入学者へのカリキュラム対応を整備して、優秀な留学生を獲得した。広報努力を継続し、HPを見ればプログラムのすべてがわかるようにした。学部生や高校生を対象としたプログラム担当者による実習も引き続き実施していて、優秀な自大学出身者の獲得につながっている。奨励金の給付はおこなっていないが、その代わりに履修生のフィールドワーク旅費(航空券代や日当宿泊費)を全面的に支援した。以上の成果として、履修生のLim Qi Luanが58th Annual Meeting of the Association for Tropical Biology and ConservationにてGentry Award for the Best Student Posterを受賞しました/卒業生のJosue Alejandroがアメリカ霊長類学会でPrimate Welfare Awardを受賞しました。/履修生の田中千聖さんが第28回日本野生動物医学会大会で最優秀ポスター賞を受賞しました。/履修生の新井花奈さんが15回アジア保全医学会(The 15th International Conference of Asian Society of Conservation

Medicine) で優秀ポスター賞を受賞しました。/履修生の Qi Luan Lim さんが未来博士 3 分間コンペティション(英語部門)で優秀賞を受賞しました。

2022 年度活動状況

※略語:PWS=霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院、WRC=野生動物研究センター、PRI=霊長類研究所、KS=熊本サンクチュアリ、JMC=公益財団法人日本モンキーセンター

※PWS 主催のものについては、主催者の記載を省略

4 月	13 日	PWS 協議員会(第 85 回)
		PWS 履修生面談@京都、@犬山
	27 日	大学院横断教育プログラム運営委員会(第 1 回)
5 月	18 日	PWS 協議員会(第 86 回)
		PWS 履修生面談@京都、@犬山
	27 日	大学院横断教育プログラム運営委員会(第 2 回)
6 月	16 日	PWS 協議員会(第 87 回)
		PWS 履修生面談@京都、@犬山
7 月	13 日	PWS 協議員会(第 88 回)
		PWS 履修生面談@京都
	20 日	PWS 履修生面談@犬山
8 月	25 日	大学院横断教育プログラム運営委員会(第 3 回)
10 月	12 日	PWS 協議員会(第 89 回)
		PWS 履修生面談@京都
	19 日	PWS 履修生面談@犬山
	6 日	大学院横断教育プログラム運営委員会(第 4 回)
11 月	9 日	PWS 協議員会(第 90 回)
		PWS 履修生面談@京都
	16 日	PWS 履修生面談@犬山
	18 日	大学院横断教育プログラム運営委員会(第 5 回)
12 月	7 日	PWS 協議員会(第 91 回)
		PWS 履修生面談@京都、@犬山
	23 日	大学院横断教育プログラム運営委員会(第 6 回)
1 月	18 日	PWS 協議員会(第 92 回)
		PWS 履修生面談@京都、@犬山
2 月	15 日	PWS 協議員会(第 93 回)
		PWS 履修生面談@京都
	22 日	PWS 履修生面談@犬山
	24 日	大学院横断教育プログラム運営委員会(第 7 回)
3 月	15 日	PWS 協議員会(第 94 回)
		PWS 履修生面談@京都
	22 日	PWS 履修生面談@犬山

8.4. 国立環境研究所との共同プロジェクト

国立環境研究所とは2013年に連携協定を締結し、絶滅危惧種のゲノム解析、細胞培養、精子保存などに関する共同研究を推進している。以前より行っているイヌワシのゲノム解析の共同研究を継続した。英国との共同で二国間交流事業共同研究・セミナー「比較ゲノム解析情報にもとづく高次捕食動物の保全を目指した国際共同研究(2021-2022年)」を実施した。2022年度はイヌワシの保全に関するオンラインセミナーを2回実施した。また9月にはスコットランドを訪問して、南部のイヌワシの放鳥サイトを視察した。また再導入プロジェクトを主導している Roy Dennis 氏を訪問し、情報収集した。さらに保全生物学コンソーシアム (http://web.cc.iwate-u.ac.jp/~takehito/wild_animal/index.html) のグループで科研費(基盤A)の支援を受けて、イヌワシやツシマヤマネコの生息域外保全に関する共同研究を行った。野生動物の絶滅を防ぐためのゲノム、細胞、生態の研究推進に向けた協力体制を整備した。「野生動物遺伝資源データベース」を共同運営し、当センターの保有するデータの一部を公開した。(http://www.nies.go.jp/time_capsule/search.php参照)

8.5. 環境研究総合推進費

絶滅の危惧される野生動物種については、保護増殖事業計画が策定され、野生復帰を目指した飼育下繁殖が行われている。しかし自然繁殖が順調でない種や、飼育集団の遺伝的多様性の維持が課題となっている種がある。繁殖に関連する機能遺伝子の個体差や多様性も種の存続に大きく影響するが、その実態は不明である。また個体ごとのストレスや繁殖周期の指標となるホルモン動態は、繁殖の成否を左右するため正確に把握する必要がある。さらに将来の安定した遺伝資源確保のためにも、生殖細胞や受精卵の保存技術も検討する必要がある。

本研究では、これらの問題解決のため生殖細胞の活用範囲を広げる。繁殖に関わるゲノムや内分泌情報を基盤として、保存生殖細胞を用いた人工授精や受精卵作製といった繁殖補助技術を確認する。哺乳類はツシマヤマネコ、鳥類はヤンバルクイナを主な対象とする。DNA、ホルモン、生殖細胞の試料および関連情報を蓄積し、それらを連携することによる保護増殖への貢献を目指すため、2つのサブテーマを設定する。**サブテーマ1の繁殖基盤情報の整備**で、国立環境研究所(研究協力機関)に保存されている遺伝資源(細胞、組織等)および非侵襲的に得られる糞や羽根に由来するDNAを解析して、遺伝的多様性、行動や性格の個体差、内分泌機能などの繁殖に影響する要因の**関連遺伝子**を探索するとともに、同じ糞や羽根から繁殖機能に関わる性ホルモンやストレスのバイオマーカーである副腎皮質ホルモン等の濃度を測定し、**遺伝的多様性や近交度、年齢、性格、ストレス**が繁殖機能低下に与える影響を評価する。**サブテーマ2の生殖細胞の活用と人工繁殖**では、まず基盤情報が充実しているイエネコやニワトリをモデル動物として**生殖細胞保存法**を新規開発する。次いでその手法を国立環境研究所(研究協力機関)、京都大学、岩手大学で保存中のツシマヤマネコとヤンバルクイナの生殖細胞を活用して種ごとに最適化し、将来的により多くの個体で繁殖を可能とする**繁殖補助技術**を確認する。

2021年度には、飼育および野生の多数個体の試料と情報の蓄積を行い、遺伝マーカー解析やホルモン濃度測定の条件を整備する。2022年度は試料を活用して、性ホルモンやストレスホルモン濃度をモニターする。また遺伝的多様性を評価するマーカーを標準化するとともに、繁殖機能低下の要因となるストレス感受性や社交性などの性格、加齢、内分泌機能に関わる遺伝子の同定と機能解析を実施した。最終年度の2023年度は、それによって策定した有効な繁殖戦略を飼育施設に提案する。ツシマヤマネコでは遺伝情報が得られた個体の生殖細胞保存および受精卵の作製、ヤンバルクイナでは保存生殖細胞を用いた人工授精による産子の作出を目指す。本課題の成果物である生殖細胞と受精卵は国立環境研究所において長期凍結保存を行い、将来の緊急時に備える。以上のように、本研究の成果は環境施策に大きく貢献し、また、他の絶滅危惧種の保全への応用が期待できる。すでに個体群存続可能性解析の結果やホルモン、行動観察の情報を飼育施設と共有している。2022年12月にはヤンバルクイナの保全に関する公開シンポジウムを開催した。http://web.cc.iwate-u.ac.jp/~takehito/erca_4-2101/

9. 動物園・水族館との連携

9.1. 動物園・水族館との連携事業・共同研究

※コロナの影響でいくつかの活動は実施できず。

京都市動物園 (<https://www5.city.kyoto.jp/zoo/> 参照)

- 1) 京都市動物園「野生動物学のすすめ」ワークショップ
- 2) 動物園での講演活動: 霊長類に関する研究の解説を中心に, 動物の生態や動物園でおこなう研究について
- 3) 京都市動物園連絡協議会 (10 回/年)
- 4) 飼育下野生動物を対象にした多様な研究
- 5) 講演会「日米の動物園・水族館における動物福祉科学」

日本モンキーセンター (<https://www.j-monkey.jp/> 参照)

- 1) 公益財団法人日本モンキーセンターの運営
- 2) ロリス保全センターの運営
- 3) 飼育施設改修計画: 展示開発、基本設計
- 4) 日本学術振興会科学研究費基盤 C(2019～2022 年度)「動物園を活用した保全教育プログラムと教材の開発と評価」
- 5) 大型類人猿情報ネットワーク(GAIN)との連携
- 6) 英文学術雑誌”Primates”(6 巻)及び和文雑誌「モンキー」(4 巻)の発行
- 7) 連携研究の受け入れ
- 8) 国際保全活動: コンゴ民主共和国: バリ(ボノボ)
- 9) 京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院・高大連携プロジェクトへの協力
- 10) 京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院・博物館・動物園実習

※その他の連携動物園・水族館との活動は

<http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/ZoosAquariums.html> を参照

9.2. 動物園大学・水族館大学

2023 年 3 月 12 日: 「動物園・水族館が挑む保全活動」

キャンパスプラザ京都とオンラインのハイブリッド開催

10. 国内研究拠点・国内機関との共同研究

10.1 幸島観察所

1) 幸島のニホンザルに関する報告

幸島観察所では、例年通り宮崎県幸島に生息する野生ニホンザルを対象に個体データの蓄積、各個体の体重計測などの基礎データの収集を行った。出産頭数 18 頭、死亡頭数 16 頭（内アカンボウ 9 頭）で 2 頭減であった。2023 年 3 月現在、85 頭である。主群 α オスは「シカ」、マキ群は「ヘソ」で変化はなかった。

2) 施設に関する報告

水道管の老朽化による漏水があり、古い屋内配管を修繕した。

研究・教育に関する報告

今年度は新型コロナウイルス（COVID-19）の影響はさらに減少し、国内の大学院生や研究者による研究が活発に行われた。国外からの研究者の利用申請も 2 件あった。都井岬での野生馬調査の研究拠点としてもよく利用された。

野外実習では京都大学野生動物研究センター学生実習が行われた。

普及啓発活動として京大ウィークス 2022 に参加し公開講座を実施した。

串間市役所の研修や技術部セミナーの講師として協力した。報道も数件依頼があり、協力した。

10.2. 屋久島観察所

1) 死亡事故

2023 年 2 月 4 日に、屋久島観察所を拠点としてニホンザルの研究調査をしていた、当研究センター所属の大学院生が滑落事故により亡くなった。屋久島で調査をしている、当センターの教職員が中心となって事故の検証を行ない、報告書を作成にあたった。報告書の作成、安全対策の検討は今年度末時点で継続中である。

事故の直後から、屋久島観察所の利用を原則的に中止し、2022 年度末まで閉鎖を継続している。事故原因の検討、安全対策の策定などを行った上で、再開を検討する。

事故後に講師を招いて安全講習会を行い、調査における安全対策の見直しを行った。

2) 研究・教育

新型コロナウイルスの感染予防のために、来所前の PCR 検査や、来所後の数日間は先に来所している他の利用者との接触を控える等の対策を行った。大学院生や研究者による研究活動は、コロナ禍前と概ね同程度に活発に行われた。（上記の事故以降を除く）

教育活動もコロナ禍前と同じ程度に実施できた。WRC の屋久島実習を 1 回実施した（野外生物学実習 A）。地域学会である「屋久島学ソサエティ」の第 10 回大会を野生動物研究センターが共催で行った。

3) 施設に関する報告

- ・2022 年 9 月 18 日に台風 14 号が屋久島付近を通過し、大きな被害があった。観察所では大きな被害はなかったが、約 36 時間停電した。停電対策として、大型のバッテリー、電池式のランタンなどを購入した。
- ・インターネットの回線を ADSL から光回線に変更した。永田地区に光回線が来たことによるもので、これによりデータのアップロードの速度が大幅に改善された。
- ・老朽化していた観察所のガスコンロを更新した。
- ・老朽化していた観察所のレーザープリンタを更新した。

10.3. 福祉長寿研究部門／熊本サンクチュアリ

熊本サンクチュアリにおいて飼育しているチンパンジー個体数は 2022 年度末時点で 51 個体となった。2023 年 3 月に、長崎鼻パーキングガーデンから 3 個体、市原ぞうの国から 1 個体のチンパンジーを受け入れた。前年度までブリーディングローンで供している京都市動物園のジェームス、および愛媛県立とべ動物園のロイとツバキは、それぞれ貸出契約を延長し、引き続き各動物園で飼育をおこなっている。熊本サン

クチュアリのチンパンジーについて、第1飼育棟には雄13個体(2~4群)、第2飼育棟には雄12個体(2~4群)、第5飼育棟には雄5個体と雌21個体(4~5群)が様々に構成を変えながら社会生活を送っている。また、第5飼育棟には、ボノボ6個体が2群で暮らしている。定期健康診断をチンパンジー8個体およびボノボ2個体で実施した他、一斉糞便寄生虫検査、エルシニアスクリーニングPCR検査等を実施した。肝炎治療薬購入のためのクラウドファンディングを実施し、計2,414万円の寄付をいただいて、過去の医学実験によりC型肝炎ウイルス持続感染となっている個体の治療を開始した。

6名の大学院生が熊本サンクチュアリに長期滞在して学位論文のための研究をおこなった。共同利用共同研究に関しては、研究利用が6件571名、試料分譲が1件1名だった。ホームページ(<http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/kumasan/>)を毎月更新し、KS活動の普及広報に努めた。

10.4. 独立行政法人理化学研究所

「霊長類(マカクサル・マーモセット)の遺伝子多型と分子イメージングとの関連」に関する研究契約を継続した。

11. 共同研究者訪問履歴表

訪問日	終了日	日数	所属		人数	訪問目的
2023/3/28	2023/3/28	1	京都大学	院生	1	研究
2023/1/5	2023/3/131	62	Benha 大学、エジプト	研究者	1	研究
2022/6/22	2022/6/22	1	京都大学	院生	1	研究
2022/4/19	2022/12/123	103	三重大学	院生	1	研究
2022/10/31	2023/3/29	10	京都大学	院生	1	研究
2022/10/4	2023/3/27	6	京都市動物園	研究者	1	研究
2022/11/28	2022/11/30	3	京都大学	研究者院生	4	研究

12. 研究集会

1) 京大ウィークス 2022 「幸島ニホンザルの観察会」

日時:2022年11月6日

場所:幸島

主催:京都大学野生動物研究センター

募集人数:20名、京大ウィークス 2022 の関連イベントとして公開講座を開催

2) 公開シンポジウム「知りたい！ ヤンバルクイナ保全の最前線」

日時:2022年12月3日

場所:国頭村民ふれあいセンター、オンライン

主催:環境研究総合推進費 4-2101 「生殖細胞を活用した絶滅危惧野生動物の生息域外保全」

共催:沖縄奄美自然環境事務所、京都大学野生動物研究センター

本シンポジウムの詳細は下記 URL に記載の通りである。

(<https://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/news/2022/2022-12-03.html>)

3) 第9回屋久島学ソサエティ大会

日時:2022年12月3-4日

場所:現地会場(屋久島環境文化村センター)およびオンライン(ハイブリッド形式)

主催:屋久島学ソサエティ

共催:屋久島町、公益財団法人屋久島環境文化財団、京都大学野生動物研究センター、国立研究開発法人森林研究・整備機構森林総合研究所九州支所、特定非営利活動法人屋久島いきもの調査隊
本シンポジウムの詳細は下記 URL に記載の通りである。

(<http://yakushimaology.org/category/%e5%a4%a7%e4%bc%9a/%e7%ac%ac10%e5%9b%9e%e5%a4%a7%e4%bc%9a/>)

4) 共同利用研究会 2022

日時:2023年2月14日

場所:京都大学野生動物研究センターおよびオンライン(ハイブリッド形式)

主催:京都大学野生動物研究センター

共催:京都大学 霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院

参加人数:約120名

本研究会の詳細は下記 URL に記載の通りである。

(<https://sites.google.com/kyoto-u.ac.jp/wrcworkshop/2022?pli=1>)

5) 第10回 DNA 細胞データベース検討会-性判定技術研修

日時:2023年2月21日

場所:オンライン

主催:京都大学野生動物研究センター

本研究会の詳細は下記 URL に記載の通りである。

(<https://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/news/2023/2023-02-21.html>)

6) 講演会「日米の動物園・水族館における動物福祉科学」

日時:2023年3月1日

場所:京都市動物園

主催:京都市動物園、京都大学野生動物研究センター

本シンポジウムの詳細は下記 URL に記載の通りである。

(<https://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/news/2023/2023-03-kyoto-city-zoo.html>)

7) 動物園水族館大学シンポジウム「動物園・水族館が挑む保全活動」

日時:2023年3月12日

場所:キャンパスプラザ京都、オンライン

主催:京都大学野生動物研究センター

共催:京都大学 霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院、京都市動物園、名古屋市東山動植物園、(公財)横浜市緑の協会(よこはま動物園 野毛山動物園 金沢動物園)、熊本市動植物園、高知県立のいち動物公園、(公財)日本モンキーセンター、わんぱーくこうちアニマルランド、愛媛県立とべ動物園、広島市安佐動物公園、名古屋港水族館、京都水族館、西海国立公園九十九島水族館、海遊館、滋賀県立琵琶湖博物館、いおワールドかごしま水族館、沖縄美ら海水族館、世界淡水魚園水族館アクア・トぎふ

参加人数:274名(オンライン)、対面参加者85名の計359名

本研究会の詳細は下記URLに記載の通りである。

(動物園水族館大学: <https://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/projects/za/2023-03.html>)

13. 海外拠点・海外機関との研究交流等

WRC はマレーシア拠点、タンザニア拠点、コンゴ民主共和国拠点、ガーナ大学拠点、アマゾン拠点、インド拠点、キルギス共和国拠点、ネパール連邦民主共和国拠点、ポルトガル研究拠点等で連携及び共同研究を行っているが、今年度はコロナ禍の影響で渡航・招聘を伴う活動は全くできなかった。しかし、現地との研究連絡や情報交換は行った。

14. 海外渡航

相馬 拓也	2022.4.14 ～5.15	在外マンス ¹ 日本大使館 JICA カトマンス、トリブバン空港植物 防疫所、中央アジア・アメリカン大 学、イシク=クル湖南岸、 ハイボースン自然保護区 (ネパール・キルギス)	遠隔地調査での調査、植 物防疫等についての情報 収集・現地調査、動物観・ 植物観、在来資源利用に 関する民族誌調査	科研費 (基盤 A・新学術)
斉 惠元	2022.5.16 ～6.13	ネパール科学技術アカデミー (ネパール)	研究打ち合わせ及び野生 ユキヒョウのDNA・ホルモン分 析	科研費 (基盤B・木下)
義村 弘仁	2022.5.16 ～6.24	ネパール科学技術アカデミー (ネパール)	研究打ち合わせ及び野生 ユキヒョウのDNA・ホルモン分 析	科研費 (基盤B・木下)
木下 こづえ	2022.5.16 ～6.13	ネパール科学技術アカデミー (ネパール)	研究打ち合わせ及び野生 ユキヒョウのDNA・ホルモン分 析	科研費 (基盤B)
竹元 博幸	2022.5.18 ～8.19	マケレレ大学、カンス森林保護 区(ウガンダ)	野生チンパンジーの生態調 査・資料収集、研究打ち合 わせ	寄付金 (LEAKEY 財団 R3 長期研究・橋本)
LIM Qi Luan	2022..5.19 ～8/8	マレーシアプトラ大学 (マレーシア)	研究打ち合わせおよび試 料のDNA解析	科研費 (特別研究員)
PINTO PANDORA	2022.5.24 ～10.25	アルガ山地、カルヴァナ山地、 ウマ保護研究センター (ポルトガル・イタリア)	野生ウマ調査、データ収集、 データ解析	科研費 (新学術・平田)

DA SILVA MENDONCA RENATA ANDREIA	2022.5.24 ～9.30	アルガ山地、カルヴァナ山地・ ウマ保護研究センター (ポルトガル・イタリア)	野生ウマ調査、データ収集、 データ解析	科研費 (新学術・平田)
相馬 拓也	2022.5.27 ～6/9	モンゴル国立大学図書館、 モンゴル科学アカデミー (モンゴル)	民俗誌・歴史史料等情報 収集	科研費 (基盤 C)
相馬 拓也	2022.6.13 ～7.2	ホカ市役所、村内在住 の農家(ネパール)	在来植物利用の伝統知に 関するインタビュー調査、希 少樹木・果樹などの栽培 実験の実施	科研費 (基盤 A)
DE ALMEIDA BORGHEZAN ELIO	2022.6.21 ～7.31	国立アマゾン研究所、 Ducke 保護区 (ブラジル)	資料、情報収集、野外調 査、研究打ち合わせ	科研費 (特別研究員)
櫻木 雄太	2022.7.8 ～9.4	イルリサット氷河フィヨルドセンター、 カーナク沖(グリーンランド)	海棲哺乳類調査のための 情報収集、機材、装備準 備、調整	受託 北大 (極地研 ArCS II)
相馬 拓也	2022.7.28 ～8.30	中央アジア・アメリカン大学、ハイ ボースン自然保護区(キルギス)	家畜動物の観察、イヌシ営 巣地点の探索、データ収 集、市内インタビュー調査	科研費 (新学術)
内藤 アンネグレート 素	2022.7.28 ～8/26	中央アジア・アメリカン大学、ハイ ボースン自然保護区(キルギ ス)	夏牧場での家畜民へのイン タビュー、データ収集、市内イン タビュー調査	科研費 (基盤B 相馬)
善本 智佳	2022.7.28 ～9/1	中央アジア・アメリカン大学、ハイ ボースン自然保護区(キルギ ス)	夏牧場での家畜民へのイン タビュー、データ収集、市内イン タビュー調査	科研費 (基盤B 相馬)

李 何萍	2022.7.28 ～8/8	ホームビーチコンベンションセンター (アメリカ)	SMM2022(第24回海棲哺乳類学会)に参加、情報収集	機関経理補助金・ 寄附金(次世代研究者挑的研究PG研究費・ 生物技研)
橋本 千絵	2022.7.30 ～8.16	カインズ森林保護区、 マケレレ大学 (ウガンダ)	野生チンパンジーの生態調査・研究打ち合わせ	科研費 (国際共同研究強化B)
伊谷 原一	2022.8.7 ～8.26	環境保全NGO、ユネスコ・アフリカ地域熱帯雨林と土地管理統合大学、ボロボ、地域ハリ (コンゴ)	野外調査、データ収集、 研究打ち合わせ	科研費 (基盤A・萌芽)
新宅 勇太	2022.8.7 ～8.26	環境保全NGO、ユネスコ・アフリカ地域熱帯雨林と土地管理統合大学、ボロボ、地域ハリ (コンゴ)	野外調査、データ収集、 研究打ち合わせ	科研費 (萌芽)
古市 剛史	2022.8.18 ～9.19	生態森林研究所、科学研究省、ワンバ調査基地	情報収集、備及び生態森林研究所長との研究打ち合わせ・現地調査(コンゴ)	科研費 (基盤B)
Andrew MACINTOSH,	2022.8.8 ～8.30	Indianapolis Zoo、 Lincoln Park Zoo、 シェルトン・デンプター・ ダウタウン・ホテル(アメリカ)	園内動物データ収集・アメリカ 霊長類学会年次会議に出席及び発表	SPIRITS A
David Fasbender	2022.8.18 ～2023.2.17	生態森林研究所、 科学研究省、 ワンバ調査基地 (コンゴ)	生態森林研究所長との研究打ち合わせ・現地調査・ 野外調査	科研費 (基盤A 椋山女学園 大松浦分担・古市)
内藤 アンネグレート 素	2022.8.28 ～9/16	エジンバラ大学・ Musselburgh Lagoons・ Roy Dennis Foundation、 フランクフルト動物園、ゼンケンベルク博物館 (イギリス・ドイツ)	European Conservation Genetics Meeting2022に参加、研究成果発表・鳥類 保全現場の視察・猛禽類 生態地視察、鳥類の生息域外保全・飼育個体群管理に関する情報収集	科研費 (特別研究員 DC2)

村山 美穂	2022.8.28 ～9.11	エジンバダ大学 (イギリス)	ConsGan22 学会に出席、 当該研究課題に係る情報 収集	受託 (学振二国間21)
木下 こづえ	2022.9.2 ～10.2	シヤムシー野生動物保護区、サ ルチャト・エルタシュ自然保護区 (キルギス)	野外調査、研究試料採 取・ 研究打ち合わせ	科研費 (JSPS 受託事業二国 間)
相馬 拓也	2022.9.6 ～9.17	日本大使館JICA カザフスタン、アルファラビ・カザ フ国立大学(カザフスタン)	中央ユーラシア研究の近 況、動向等の情報収集・民 族誌・歴史史料等情報収 集	科研費 (挑戦的研究・萌芽)
徳山 奈帆子	2022.9.6 ～12.5	ジヨルイミグレーションオフィス、 ルオー学術保護、・ コンゴ環境省 (コンゴ)	地域住民とボノボの関係に ついて現地調査。行動生 態調査・研究打ち合わせ	科研費 (基盤 A 相山女学園 松浦分担・基盤 A 高等研山本分担繰 R3・R4)
森村 成樹	2022.9.24 ～10/27	ホッソウ村周辺地域・ DGERSIT (ギニア共和国)	ホッソウにおける野生チンパ ンジーの研究調査および保 全に関する活動・	受託 (三井物産環境資 金)
相馬 拓也	2022.10.15 ～11.2	中央アジア・アメリカン大学、ピシ ュケ市街地等、セミュノフカ夏 牧場(キルギス)	ピシュケ市内でのインタビュー 調査・鷲匠および遊牧民 宅で伝統知の聞き取り調 査	科研費(新学術)・ 運営費
三谷 曜子	2022.10.18 ～10.27	Maison Universitaire France-japon、centre for Biological Studies of Chizé (フランス)	30th Kyodai-Unistra symposiumに参加及び講 演・研究打ち合わせ及び 情報収集	科研費(基盤 B)・ 先方負担 (京都大学国際交流 課)
竹元 博幸	2022.10.21 ～2023.3.2	マケレ大学、 カインズ森林保護区 (ウガンダ)	野生チンパンジーの生態調 査・資料収集、研究打ち合 わせ	科研費 (国際共同研究強化 B)

新井 加奈	2022.10.22 ～11.1	Chiang Mai University (タイ)	The 15th International Conference Of Asian Society Of Conservation Medicine 学会に参加・発 表、情報収集	科研費 (基盤 A・村山)
斉 惠元	2022.10.22 ～11.1	Chiang Mai University (タイ)	The 15th International Conference Of Asian Society Of Conservation Medicine 学会に参加・発 表、情報収集	科研費 (基盤 B・木下)
DA SILVA MENDONCA RENATA ANDREIA	2022.11.24 ～2023.2.28	コインブラ大学 (ポルトガル)	当該プロジェクトにかかる研 究打ち合わせ、データ解析	科研費 (新学術 平田)
三谷 曜子	2022.11.27 ～12.11	商船三井モーリシャス・ブルー ペイオフィス、グラントリヴェールブラ ックリバー、Ocean Vibration 社 (モーリシャス)	ブルーフロンティア・プロジェクトに かかる研究打ち合わせ・現 地調査	先方負担 (北海道大学)
村山 美穂	2022.12.10 ～12.18	ガーナ大学、グラスカッター 飼育農家、Wa Regional Office (ガーナ共和国)	グラスカッター飼育農家の状 況モニタリングおよび情報収 集・ワークショップ	科研費 (国際強化 B 遺伝 研)
Michael Huffman	2022.12.15 ～2023.1.7	スリジャヤワルデネプラ大学、 Hakgala・Madhu (スリランカ)	サルの行動観察及びサンプル 採集・研究打ち合わせ	寄付金 (京都大学教育研究 振興財団)
橋本 千絵	2022.12.24 ～2023.1.8	カンス森林保護区、マケレレ大 学(ウガンダ)	野生チンパンジーの生態調 査・研究打ち合わせ	科研費 (国際共同研究強化 B)
森村 成樹	2023.1.22 ～2.16	ボッソウ村周辺地域・ DGERSIT (ギニア共和国)	ボッソウにおける野生チンパ ンジーの研究調査および保 全に関する活動・	受託 (三井物産環境資 金)

古市 剛史	2023.1.26 ～2.19	カリス'森林保護区、マケレ 大学(ウガンダ)	野生チンパンジーの生態調 査・研究打ち合わせ	科研費(基盤 B)
相馬 拓也	2023.1.10 ～1.28	カザフ国立大学、中央アジア・ アメリカン大学、オシ教育大学、 カザフ国立大学 (キルギス)	モンゴル研究と比較資料、民 族誌、歴史史料・情報収 集・フィールド調査	科研費 (基盤 B・基盤 C)
Kenneth keuk	2023.2.2 ～3.25	マレーシアサバ'大学、サバ'州野 生生物局、キヤス森林保護区 (マレーシア)	現地調査・サンプル及びデー タ収集	科研費 (基盤 B Andrew)
POKHAREL Sanjeeta Sharma	2023.3.6 ～3.20	インド科学大学、 ジム・コルベット国立公園、 Royal Plaza (インド)	IUCN アジアゾウ専門グループ 委員会に参加、情報収 集、意見交換	科研費 (外国人特別研究員 木下)
SHUKRONA SHODIEVA	2023.3.3 ～3.28	タジク大学、科学アカデミー国 立博物館、国立図書館、JICA ウズ'ベキスタン、チョルス'パサル(タ ジキスタン・ウズベキスタン)	動物観、昔語り、オーラルヒス トリーのインタビュー、データ収集	運営費 (白眉予算)
相馬 拓也	2023.3.3 ～3.28	タジク大学、科学アカデミー国 立博物館、国立図書館、JICA ウズ'ベキスタン、チョルス'パサル(タ ジキスタン・ウズベキスタン)	インタビュー、データ収集	科研費 (新学術・基盤 B)
Andrew MACINTOSH,	2023.3.17 ～3.22	Nnanyang Technological University・Singapore Zoo (シンガポール)	共同研究者と当該プロジェク トに関する打ち合わせ・企 画・調整	科研費 (基盤 B・SPIRITS)

15. 自己点検評価

野生動物研究センターで重点的に取り組んでいる項目について、自己点検評価の概要を記す。

新型コロナウイルスの影響

2022年度は2020、2021年度に比べると、新型コロナウイルスの影響は小さくなった。今年度は海外への渡航、海外の学生・研究者に日本に来てもらうこともかなりできた。まだ制約はあったもの、かなり従来の活動ができるようになった。オンラインを使った、研究会や教育活動は急激に増加した。オンラインやハイブリッド形式でのミーティングや授業が当たり前ものになってきた。

共同利用拠点として機能の充実

野外および動物園・水族館などの飼育下の野生動物の研究を中心に、共同利用研究を進めた。ほとんどの課題は実施できた。研究会や共同利用・共同研究拠点の各種委員会はハイブリッド形式も併用しながら例年並みに実施できた。

動物園・水族館との連携、研究・教育の推進

研究については前年と同程度には実施できたと言える。動物園と水族館合同でのシンポジウム「動物園・水族館大学」を、ハイブリッド形式で実施した。

海外研究拠点の整備、研究・教育の推進

海外との共同研究は、今年度はかなり行うことができた。2020、2021年度はほとんど渡航ができなかったため、現地に赴いてのカウンターパートとの連絡や施設の整備に注力した。

教育・研究

概ね例年どおり、順調に行うことができた。新型コロナウイルスの影響で縮小していた実習なども、今年度は実習なども概ね実施することができた。留学生が急激に増えてきたことにともない、英語での教育や事務処理などを進めている。

広報・普及活動

公式 Twitter を 2018 年度末より開始し、調査対象動物の映像を紹介や、講演会や研究会の通知などに本格的に活用した。ニュースレターも 2018 年度末より開始し、2022 年度は 5 号を発行した。研究内容を分かりやすく伝えるものであり、一般の人が研究に親しみを持ってくれることが期待できる。

幸島のニホンザルの一般公開と屋久島での地域学会への協力の 2 件の普及活動をおこなった。幸島のニホンザルの一般公開では、試験的にオンラインでの中継もおこなった。

16. 2022 年度研究業績

執筆文章 (和文)

板原 彰宏, 狩野 文浩 (2022) “Corvid Tracking Studio”: A custom-built motion capture system to track head movements of corvids「Corvid Tracking Studio」カラスの頭部の動きを記録する モーションキャプチャシステムの構築, 動物心理学研究 72, 1, 1-16

荒蒔 祐輔, 魚津 諒大, 金澤 朋子, 渡邊 駿, 福田 健二, 浦島 匡, 田中 正之(2022) アメリカバクにおける乳成分組成および仔の吸乳頻度, ミルクサイエンス 71(2): 34-41

杉元 拓斗, 平田 聡 (2022) Horses' preferential looking to humans based on problem-solving ability ヒトの問題解決能力の有無に基づくウマの選好注視. *Japanese Journal of Animal Psychology* 72(1): 17-25

伊谷 原一, 三砂 ちづる (2022) ヒトはどこからきたのか: サバンナと森の類人猿から, 亜紀書房

持田 浩治(2022)第三部 爬虫類・両生類、動物の体色がわかる図鑑、秋山豊子(監修) グラフィック社 144-167

村山 美穂 (2022) トピックス 大型げっ歯類グラスカッターの家畜化、臨床栄養 140. 6. 829-832

堀 裕亮, 谷藤 誠斗, 戸松 太一, 上野 将敬, 村山 美穂, 河合 正人, 瀧本 彩加 (2022) 北海道和種における母ウマの子育ての特徴を予測する統計モデルの構築、DNA 多型 30: 16-20

今野 晃嗣, 村山 美穂 (2022) イヌの「性格」の遺伝的基盤—人類の「最良の友」の行動形質はどのように進化してきたか? 生物の科学 遺伝 76(5): 346-353

村山 美穂 (2022) 動物を語る : DNA から動物を知りたいうんちから年齢や性格も分かる? Habataki 2023 WINTER/SPRING 5

村山 美穂 (2022) 4 章 心の進化を遺伝子からみる —不安・好奇心・幸福度、レジリエンス人類史、稲村哲也, 山極 壽一, 清水展, 阿部 健一(編)、京都大学学術出版会

山梨 裕美 (2022) 第4章 動物園動物の福祉 第2-2節、動物福祉学、新村毅(編)、昭和堂

谷口 晴香 (2022) ヤクシマザルの離乳期のアカンボウの伴食行動:アカンボウの集まりに着目して生態人類学会ニュースレター 28; pp.18-24

平田 聡 (2022) 心の多様性とウマ研究 —瀧本論文へのコメント— 心理学評論 65(3): 356-359

三谷 曜子 (2022) 連載ワイワイワイルドドライブ(第1回)キタオットセイをめぐる過去と現在、モンキー 7(1): 14-15

執筆文章 (英文)

Roy Hammer, Mathieu S. Stribos, Pia M. Boehm, Katharina E. Pink, Julia Herzele, Bernard Wallner, Michael A. Huffman, Jorg JM Massen, Lena S. Pflüger. (2023) A novel methodological approach for group classification during fission of a semi-free-ranging group of Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *American Journal of Primatology* 85(2): e23463

Elodie Freymann, Michael A. Huffman, Geresomu Muhumuza, Monday M Gideon, Klaus Zuberbühler, Catherine Hobaiter. (2023) Friends in high places: Interspecific grooming between chimpanzees and primate prey species in Budongo Forest, *Primates* 64, 325–337

Raquel Costa, Rafaela SC Takeshita, Masaki Tomonaga, Michael A. Huffman, Gladys Kalema-Zikusoka, Fred Bercovitch, Misato Hayashi. (2023) The impact of tourist visits on mountain gorilla behavior in Uganda, *Journal of Ecotourism*

Michael A. Huffman. (2022) Editorial, The lessons of history and tradition- On becoming a monkey and other insights gained as a primatologist in Japan, *Primates* 64, 5-8

Valéria Romano, Amy Lussiana, Katy M Monteith, Andrew JJ MacIntosh, Pedro F Vale. (2022) Host genetics and pathogen species modulate infection-induced changes in social aggregation behaviour, *Biology letters* 18(8): 20220233

Zhihong Xu, Andrew JJ MacIntosh, Alba Castellano-Navarro, Emilio Macanás-Martínez, Takafumi Suzumura, Julie Duboscq. (2022) Linking parasitism to network centrality and the impact of sampling bias in its interpretation, *PeerJ* 10:e14305

Raquel FP Costa, Valéria Romano, André S Pereira, Jordan DA Hart, Andrew MacIntosh, Misato Hayashi. (2022) Mountain gorillas benefit from social distancing too: Close proximity from tourists affects gorillas' sociality, *Conservation Science and Practice* 5(1):e12859

Marion Cheron, Akiko Kato, Yan Ropert-Coudert, Xavier Meyer, Andrew JJ MacIntosh, Léa Raelison, François Brischoux. (2023) Exposure, but not timing of exposure, to a sulfonylurea herbicide alters larval development and behaviour in an amphibian species, *Aquatic Toxicology* 254, 106355

Benjamin Beltzung, Lison Martinet, Andrew JJ MacIntosh, Xavier Meyer, Jérôme Hosselet, Marie Pelé, Cédric Sueur. (2023) To Draw Or Not To Draw: Understanding The

- Temporal Organization Of Drawing Behavior Using Fractal Analyses, *Fractals* 31(01):2350009
- Alba Castellano - Navarro, Víctor Beltrán Francés, Anna Albiach - Serrano, Andrew JJ MacIntosh, Risma Illa Maulany, Putu O Ngakan, Katja Liebal, Federica Amici. (2022) Maternal and offspring behavior in free-ranging Japanese and moor macaques: A comparative approach. *American Journal of Primatology* 85(2): e23461
- Cécile Sarabian, Anna Wilkinson, Marie Sigaud, Fumihiro Kano, Jorge Tobajas, Anne - Sophie Darmaillacq, Gladys Kalema-Zikusoka, Joshua M Plotnik, Andrew JJ MacIntosh (2023) Disgust in animals and the application of disease avoidance to wildlife management and conservation
Journal of Animal Ecology
- Misaki Hori, Satoko S. Kimura, Yuichi Mizutani, Yoshimi Miyagawa, Konomi Ito, Nobuaki Arai, Yasuaki Niizuma (2022) Detection of telomere length and oxidative stress in Chondrichthyes, *Fisheries Science* 88(6) 741-750
- Midori Yoshikawa, Hideshi Ogawa, Masaaki Koganezawa, Gen'ichi Idani (2022) Seasonal food changes and feeding behaviour adaptations of savanna chimpanzees at Nguye in Ugalla, Tanzania, *Primates* 63, 585–601
- Valeria Albanese, Roberta Berardi, Miquel Llorente, Michael A. Huffman, Jean-Baptiste Leca. (2022) Mechanisms of expression of object play: A comparative study of stone handling in two captive groups of long-tailed macaques (*Macaca fascicularis fascicularis*) *Behavioural Processes* 203: 104774
- Erik J. Scully, Weimin Liu, Yingying Li, Jean-Bosco N. Ndjango, Martine Peeters, Shadrack Kamenya, Anne E. Pusey, Elizabeth V. Lonsdorf, Crickette M. Sanz, David B. Morgan, Alex K. Piel, Fiona A. Stewart, Mary K. Gonder, Nicole Simmons, Caroline Asimwe, Klaus Zuberbühler, Kathelijne Koops, Colin A. Chapman, Rebecca Chancellor, Aaron Rundus, Michael A. Huffman, Nathan D. Wolfe, Manoj T. Duraisingh, Beatrice H. Hahn, Richard W. Wrangham (2022) The ecology and epidemiology of malaria parasitism in wild chimpanzee reservoirs. *Communication Biology* 5, 1020
- Tejeshwar Dhananjaya, Sayantan Das, Monica Harpalani, Michael A. Huffman, Mewa Singh (2022) Can urbanization accentuate hand use in the foraging activities of primates? *American Journal of Biological Anthropology* 178: 667–677
- Nobuyuki Kutsukake, Migaku Teramoto, Seiji Honma, Yusuke Mori, Takafumi Ishida, Toshikazu Hasegawa (2023) Changes in salivary cortisol and testosterone levels in male chimpanzees during the process of reunion with group members, *acta ethologica* 26, 45–58
- Yukiko SASSA-O'BRIEN, Kenji Ohya, Saori Yasuda-Koga, Rajesh Chahota, Shota Suganuma, Miho Inoue-Murayama, Hideto Fukushi, Boniface Kayang, Erasmus Henaku Owusu, Yasuhiro Takashima (2022) Chlamydial species among wild birds and livestock in the foothills of Mt. Afadjato, Ghana. *Journal of Veterinary Medical Science* 84(6): 817-823
- Yoshinori Endo, Ken-ichiro Kamei, Kouichi Hasegawa, Keisuke Okita, Hideyuki Ito, Shiho Terada, Miho Inoue-Murayama (2022) Generation and Gene Expression Profiles of Grevy's Zebra Induced Pluripotent Stem Cells. *Stem Cells and Development* 31(9-10): 250-257
- Hideyuki Ito, Nobuyoshi Nakajima, Manabu Onuma, Miho Inoue-Murayama (2022) Comparison of the genetic diversity of the captive and wild populations of the Tsushima leopard cat using a GRAS-Di analysis. *Animals* 2(11):1464
- Etienne François Akomo-Okoue, Eiji Inoue, Christiane Atteke, Yoshihiro Nakashima, Shun Hongo, Miho Inoue-Murayama, Juichi Yamagiwa (2022) Effect of landscape features on the genetic structure of forest duikers (Cephalophinae) in Moukalaba forest, Gabon. *Mammalian Biology* 102: 1879–1888
- Masafumi Katayama, Tomokazu Fukuda, Takehito Kaneko, Yuki Nakagawa, Atsushi Tajima, Mitsuru Naito, Hitomi Ohmaki, Daiji Endo, Makoto Asano, Takashi Nagamine, Yumiko Nakaya, Keisuke Saito, Yukiko Watanabe, Tetsuya Tani, Miho Inoue-Murayama, Nobuyoshi Nakajima, Manabu Onuma (2022) Induced pluripotent stem cells of endangered avian species. *Communications BIOLOGY* 5: 1049
- Hirohito Ogawa, Kenji Ohya, Raphael Ayizanga, Hiroko Miyamoto, Asako Shigeno, Masao Yamada, Yasuhiro Takashima, Miho Inoue-Murayama, Ayato Takada, Boniface B Kayang (2022) Detection of anti-ebolavirus antibodies in Ghanaian pigs. *Journal of Veterinary Medical Science* 84(11): 1491-1494
- Kurukulasuriya MJ Ahiagbe, Christopher Adenyo, Miho Inoue-Murayama, Esinam N Amuzu-Aweh, Patrick Bonney, Boniface B Kayang (2022) Single Nucleotide Polymorphisms in Insulin-like Growth Factor 2 (IGF2) gene and their associations with body weight and growth rate traits in indigenous guinea fowls (*Numida meleagris*) of

northern Ghana *Animal Gene* 27: 200139

- Christopher Adenyo, Frederick Besil, Iffat Jahan, Shamima Ahmed, Yoshiki Matsumoto, Boniface Baboreka Kayang, Miho Inoue-Murayama (2022) An exploration study of entomophagy in North-Western Ghana for alternative and sustainable protein supply. Titus Stanislaus Saanaakyaavuure Dery, *JICHA Journal* 9(1) 1-23
- N Kazahari, E Inoue, N Nakagawa, Y Kawamoto, T Uno, M Inoue-Murayama (2023) Genetic effects of demographic bottleneck and recovery in Kinkazan Island and mainland populations of Japanese macaques (*Macaca fuscata*). *Primates* 64: 239-246
- Lanlan Bai, Noe Kikuchi, Takahiro Eitsuka, Himari Matsusaka, Kiyotaka Nakagawa, Masafumi Katayama, Keiko Ito, Miho Inoue-Murayama, Tohru Kiyono, Tomokazu Fukuda (2023) Immortalization of primary cells derived from the endangered Ryukyu long-furred rat. *In Vitro Cellular & Developmental Biology-Animal* 59(3): 224-233
- David Fasbender, Uyulu Yamba, Kenneth Keuk, Terese Hart, John Hart, Takeshi Furuichi (2022) Bonobo social organization at the seasonal forest-savanna ecotone of the Lomami national park. *American Journal of Primatology* 84(12), e23448
- Shiori Nakamura, Jumpei Yamazaki, Naoya Matsumoto, Miho Inoue-Murayama, Huiyuan Qi, Masami Yamanaka, Masanao Nakanishi, Yojiro Yanagawa, Mariko Sashika, Toshio Tsubota, Hideyuki Ito, Michito Shimozuru (2023) Age estimation based on blood DNA methylation levels in brown bears. *Molecular Ecology Resources* 00, 1– 15
- Akiko Sawada, Takashi Hayakawa, Yosuke Kurihara, Wanyi Lee, Goro Hanya (2022) Seasonal responses and host uniqueness of gut microbiome of Japanese macaques in lowland Yakushima. *Animal Microbiome* 4, 54
- Ikki Matsuda (2022) Following the trail of the elusive proboscis monkey in Borneo. *Ecological Research* 37(5): 532-567
- Satoru Hoshino, Satoru Seino, Akinori Azumano, Augustine Tuuga, Senthilvel KSS Nathan, Diana AR Saldivar, Benoit Goossens, Milena Salgado-Lynn, Ikki Matsuda, Masato Yayota (2023) Modifying the diets of captive proboscis monkeys in a temperate zoo to reduce weight loss and renal disease. *Primates* 64: 123-141
- Aru Toyoda, Tamaki Maruhashi, Suchinda Malaivijitnond, Kazunari Matsudaira, Zin Arai, Ikki Matsuda, Hiroki Koda (2023) Macaque progressions: passing order during single-file movements reflects the social structure of a wild stump-tailed macaque group *Primates* 64: 351-359
- Shiho Furumaki, Saki Shigematsu, Yuka Iwahara, Yoko Mitani (2023) Fall distribution and diversity of cetaceans along the southern and eastern coasts of Hokkaido, Japan. *Regional Studies in Marine Science* 62, 102913
- André B. da Cruz, Satoshi Hirata, Manuel E. dos Santos, Renata S. Mendonça (2023) Show me your best side: Lateralization of social and resting behaviors in feral horses. *Behavioural Processes* 206: 104839
- Madoka Hattori, Atsuko Saito, Miho Nagasawa, Takefumi Kikusui, Shinya Yamamoto (2022) Changes in Cat Facial Morphology Are Related to Interaction with Humans. *Animals* 12(24), 3493
- Qi Luan Lim, Christina SY Yong, Wei Lun Ng, Ahmad Ismail, Jeffrine J Rovie-Ryan, Norsyamimi Rosli, Miho Inoue-Murayama, Geetha Annavi (2022) Population genetic structure of wild Malayan tapirs (*Tapirus indicus*) in Peninsular Malaysia revealed by nine cross-species microsatellite marker. *Ecology and Conservation* 40:e02321
- Vanessa N. Gris, Nelson Broche, Akihisa Kaneko, Munehiro Okamoto, Juri Suzuki, Daniel S. Mills, Takako Miyabe-Nishiwaki (2022) Investigating subtle changes in facial expression to assess acute pain in Japanese macaques *Scientific Reports* 12, 19675
- Nozomi Kobayashi, Satomi Kondo, Koki Tsujii, Katsuki Oki, Masami Hida, Haruna Okabe, Takashi Yoshikawa, Ryuta Ogawa, Chonho Lee, Naoto Higashi, Ryosuke Okamoto, Sachie Ozawa, Senzo Uchida, Yoko Mitani (2022) Interchanges and movements of humpback whales in Japanese waters: Okinawa, Ogasawara, Amami, and Hokkaido, using an automated matching system. *PLoS ONE* 17(11): e0277761
- Koki Tsujii, Tomonari Akamatsu, Ryosuke Okamoto, Kyoichi Mori, Yoko Mitani (2022) Tidal effects on periodical variations in the occurrence of singing humpback whales in coastal waters of Chichijima Island, Ogasawara, Japan. *Scientific Reports* 12, 19702
- Daisuke Muramatsu, Leandro Vieira Vidal, Edson Rodrigues Costa, Ken Yoda, Tsuneaki Yabe, Marcelo Gordo (2022) Low-cost thermoregulation of wild sloths revealed by heart rate and temperature loggers. *Journal of Thermal Biology* 110: 103387

- Sok Hwan Lee, Shinya Yamamoto (2022) The evolution of prestige: Perspectives and hypotheses from comparative studies. *New Ideas in Psychology* Volume 68, 100987
- Tomoyoshi Terada, Tadamichi Morisaka, Ikuo Wakabayashi, Motoi Yoshioka (2022) Communication sounds produced by captive narrow-ridged finless porpoises (*Neophocaena asiaeorientalis*). *Journal of Ethology* 40, 245-256
- Hisayo Suzuki, Michael A. Huffman, Yukio Takahata (2022) Process of Japanese macaque group fission at Arashiyama and the influences of maternal kin relations and social relations between adult males and females on it. *Primates* 64:79-90
- Andrea Viviano, Michael A. Huffman, Caterina Senini, Emiliano Mori (2022) Do porcupines self-medicate? The seasonal consumption of plants with antiparasitic properties coincides with that of parasite infections in *Hystrix cristata* of Central Italy. *European Journal of Wildlife Research* 68, 72
- Hideo Hasegawa, Kei Hayashi, Yuko Akita, Yumi Une, Michael A. Huffman, Keiko Matsuura (2022) Developmental Stages of *Grasshenia procaviae* Petter, 1959 (Cosmocercoidea: Atractidae) Found in the Stomach of Cape Hyrax (*Procavia capensis*). *Journal of Parasitology* 108(4) 366-373
- James Brooks, Fumihiro Kano, Hanling Yeow, Naruki Morimura, Shinya Yamamoto (2022) Testing the effect of oxytocin on social grooming in bonobos. *American Journal of Primatology* e23444
- Kodzue Kinoshita, Misa Suzuki, Yuuta Sasaki, Aya Yonezawa, Hisayoshi Kamitani, Ryuta Okuda, Tatsuya Ishikawa, Kenta Tsukui, Shiro Kohshima (2022) Characteristics of urine spraying and scraping the ground with hind paws as scent-marking of captive cheetahs (*Acinonyx jubatus*) *Scientific Reports* 12, 15594
- Wen-Bo Li, Pei-Pei Yang, Dong-Po Xia, Michael A. Huffman, Ming Li, Jin-Hua Li. (2022) Ecotourism Disturbance on an Endemic Endangered Primate in the Huangshan Man and the Biosphere Reserve of China: A Way to Move Forward *Biology* 11(7), 1042
- Takuya Matsumoto, Shigeaki Okumura, Satoshi Hirata (2022) Non-contact respiratory measurement in a horse in standing position using millimeter-wave array radar. *Journal of Veterinary Medical Science* 84 (10): 1340-1344
- James Brooks, Shinya Yamamoto (2022) The evolution of group-mindedness: comparative research on top-down and bottom-up group cooperation in bonobos and chimpanzees. *Current Opinion in Behavioral Sciences* 47: 101205
- Takumasa Yokoyama, Takeshi Furuichi (2022) Why bonobos show a high reproductive skew towards high-ranking males: analyses for association and mating patterns concerning female sexual states *Primates* 63(5):483-494
- Satoshi Hirata, Kristin Havercamp, Yumi Yamanashi, Toshifumi Uono (2022) Hepatitis C virus infection reduces the lifespan of chimpanzees used in biomedical research *Biology Letters* 18: 20220048
- Xiaochan Yan, Yohey Terai, Kanthi A Widayati, Akihiro Itoigawa, Laurentia HPS Purba, Fahri Fahri, Bambang Suryobroto, Hiroo Imai (2022) Functional divergence of the pigmentation gene melanocortin-1 receptor (MC1R) in six endemic *Macaca* species on Sulawesi Island. *Scientific Reports* 12: 7593
- Sanjeeta Sharma Pokharel, Nachiketha Sharma, Raman Sukumar (2022) Viewing the rare through public lenses: insights into dead calf carrying and other thanatological responses in Asian elephants using YouTube videos. *Royal Society Open Science* 9: 211740
- Shambhu Paudel, John L Koprowski, Usha Thakuri, Yukiko Sasaki-Yamamoto, Shiro Kohshima (2022) Behavioral responses to spatial heterogeneity in endangered Ganges River dolphins (*Platanista gangetica gangetica*). *Water Biology and Security* 1:100058
- Renata S Mendonça, Pandora Pinto, Tamao Maeda, Sota Inoue, Monamie Ringhofer, Shinya Yamamoto, Satoshi Hirata (2022) Population Characteristics of Feral Horses Impacted by Anthropogenic Factors and Their Management Implications. *Frontiers in Ecology and Evolution* 10: 848741
- Hayato Kikuchi, Shigeyuki Izumiyama, Tatsuo Oshida (2022) Does communal nesting help thermoregulation in Japanese flying squirrels (*Pteromys momonga*) in winter? *Russian Journal of Theriology* 21(1): 38-44
- Toshiki Minami (2022) Ventrto-Ventral Copulation by an Adult Male-Female Pair of Japanese Macaques at Arashiyama *Letters on Evolutionary Behavioral Science* 13(1): 15-20
- Mayako Fujihara, Jun-ichi Shiraishi, Manabu Onuma, Yoshiyuki Ohta, Miho Inoue-Murayama (2022) Cryopreservation competence of chicken oocytes as a model

of endangered wild birds: Effects of storage time and temperature on the ovarian follicle survival. *Animals* 12(11):1434

Pandora Pinto, Renata S Mendonça, Satoshi Hirata (2022)

Examining the costs and benefits of male-male associations in a group-living equid. *Applied Animal Behaviour Science* 253: 105660

Kristin Haverkamp, Matilda Brindle, Volker Sommer, Satoshi Hirata. (2022)

Spontaneous nocturnal erections and masturbation in captive male chimpanzees (*Pan troglodytes*). *Behaviour* 159(12), 1177-1191

James Brooks, Fumihiko Kano, Yuri Kawaguchi, Shinya Yamamoto (2022)

Oxytocin promotes species-relevant outgroup attention in bonobos and chimpanzees. *Hormones and Behavior* 143: 105182

Kazuya Toda, Keiko Mouri, Heungjin Ryu, Tetsuya Sakamaki, Nahoko Tokuyama, Takumasa Yokoyama, Shohei Shibata, Marie-Laure Poiret, Keiko Shimizu, Chie Hashimoto, Takeshi Furuichi (2022) Do female bonobos (*Pan paniscus*) disperse at the onset of puberty? Hormonal and behavioral changes related to their dispersal timing. *Hormones and Behavior* 142, 105159

Maegan Fitzgerald, Erik P Willems, Aly G Soumah, Tetsuro

Matsuzawa, Kathelijne Koops (2022) To drum or not to drum: Selectivity in tree buttress drumming by chimpanzees (*Pan troglodytes verus*) in the Nimba Mountains, Guinea. *American Journal of Primatology* 84:e23382.

Fahmida Wazed Tina, Daisuke Muramatsu (2022) Males

signal their breeding burrow characteristics to females in the fiddler crab *Austruca perplexa*. *Behaviour* 159(11), 1045-1062

Lauren M. Robinson, Alexander Weiss (2022) *Nonhuman*

Primate Welfare, Primate Personality and Welfare、Springer

Michael A. Huffman, Charmalie AD Nahallage, Tharaka

Ananda, Nelum Kanthilatha, Nimal Perera, Massimo Bardi, Gamini Adikari (2022) The Prehistoric Nonhuman Primate Subfossil Remains at Sigiriya Potana Cave, Sri Lanka, *World Archaeoprimateology: Interconnections of Humans and Nonhuman Primates in the Past*, Cambridge University Press, 456-4732022

Hirofumi Hirakawa, Daisuke Muramatsu, Marcelo Gordo,

Akiko Takii, Shigeyuki Izumiyama (2022) GAP method: a

gap-based technique for outlier detection and its application to wildlife GPS data, Research Square

受賞

Andrew JJ MacIntosh Top-cited Paper Award, American

Journal of Primatology 2022年4月

Qi Luan Lim Runner-up of the HIRAKU 3MT Competition

2022 (English Division) 2022年11月

Josue Alejandro ASP Primate Welfare Award

2022年8月

Kana Arai 優秀ポスター賞, the 15th International

Conference of Asian Society of Conservation Medicine 2022年10月

越智 咲穂, 前田 玉青, リングホーフアー 萌奈美, 伊藤 真,

一方井 祐子, 西條 未来, 太田 菜央 第一回日本動物行動振興奨励賞 2022年11月

田中 千聖 第28回日本野生動物医学大会 最優秀ポ

スター賞 2022年9月

Qi L Lim Gentry Award for the Best Student Poster, 58th

Annual Meeting of the Association for Tropical Biology and Conservation 2022年7月

学会等での発表・講演(日本語)

小林 亜美, 齋藤 華, 高月 美乃里, 中島 彩希, 横尾 凜子,

権藤 岳, チン ペイニ, 徳山 奈帆子, 山本 真也 ミーアキャットの見張り行動と周囲環境との関係. 第67回プリマーテス研究会 (ポスター発表) 2023年2月

木村 ななみ, 清水 郁未, 中井 悠人, 森純 怜, 渡邊 萌衣,

迫田 祐樹, 村上 聡, 徳山 奈帆子, 山本 真也 カモの最適な生活環境に関する考察. 第67回プリマーテス研究会 (ポスター発表) 2023年2月

川上 若葉, 梶 六花, 山口 隼, 鈴木 空翔, 本田 克樹, 川

村 康太郎, 岩井 宏平, 池山 睦衛, 徳山 奈帆子, 山本 真也 飼育下の子キリンにおける社会的行動の傾向の変化. 第67回プリマーテス研究会 (ポスター発表) 2023年2月

阿野 隆平, 星野 智紀, 田中 ちぐさ, 廣澤 麻里, 綿貫 宏

史朗 日本モンキーセンターにおけるマンドリルの群れ

- 管理について. 第 67 回プリマーテス研究会 (ポスター発表) 2023 年 2 月
- 新宅 勇太 日本モンキーセンター飼育霊長類標本データベース(Caprico):公開 10 年を経過しての課題. 第 67 回プリマーテス研究会 2023 年 2 月
- 三谷 曜子 知床の海棲哺乳類. 第 124 回 京都大学丸の内セミナー 2022 年 10 月
- 木下 こづえ 希少ネコ科動物たちの生理状態を知る. 第 82 回日本動物心理学会公開シンポジウム 2022 年 10 月
- 三谷 曜子 『なぜこの海にシャチはくるのか』日本鳥学会 2022 年度大会公開シンポジウム 2022 年 11 月
- 木下 こづえ 動物たちのストレスを糞中ホルモンから評価するー希少ネコ科動物編ー. 第 343 回京都大学生態研セミナー 2023 年 2 月
- 三谷 曜子 鰭脚類:海と陸に生きる動物の生態と行動. 第 343 回京都大学生態研セミナー 2023 年 2 月
- 三谷 曜子 『ヒトはラッコやオットセイとあたらしい関係を築けるか』第 18 回京都大学附置研究所・センターシンポジウム「創造への多様性ー京大の多彩な最先端」 2023 年 3 月
- 李 述冰, 山田 順子, 石原 暢, 村山 美穂, 高橋 英彦, 松田 哲也, 高岸 治人 相互協調的自己観を支える脳機能・脳構造ネットワーク. 第 25 回日本ヒト脳機能マッピング学会 2023 年 2 月
- 北 夕紀, 久野 晃子, 小木 万布, 村山 美穂 糞由来 DNA を用いた御蔵島ミナミハンドウイルカの食性解析、令和5年度日本水産学会春季大会 2023 年 3 月
- 村山 美穂、佐藤 悠、伊藤 英之 絶滅危惧動物種の保全への遺伝的多様性データの活用 第 70 回日本生態学会大会 2023 年 3 月
- 中村 汐里, 山崎 淳平, 松本 直也, 伊藤 英之, 村山 美穂, 齊 恵元, 木下こづえ, 山中 正実, 柳川 洋二郎, 佐鹿 万里子, 坪田敏男, 下鶴倫人 血液を用いてヒグマの年齢を推定する ~DNA メチル化率を指標として~ 第 70 回日本生態学会大会 2023 年 3 月
- 鈴木 彩月, 内藤 アンネグレート素, 大沼 学, 中谷 由美子, 村山美穂 DNA メチル化を指標としたヤンバルクイナの年齢推定 第 4 回動物園水族館大学シンポジウム 2023 年 3 月
- 藤原 摩耶子, 村山 美穂 卵子保存による野生動物保全 ~ ラボ、飼育下、野生下をつなげた取り組み~ 第 4 回動物園水族館大学シンポジウム 2023 年 3 月
- 新井 花奈, 齊 恵元, 村山 美穂 DNA メチル化を指標としたアジアゾウの年齢推定. 第 4 回動物園水族館大学シンポジウム 2023 年 3 月
- 鈴木 瑛之 日本国内飼育コツメカワウソの地理的由来の推定 第 4 回動物園水族館大学シンポジウム 2023 年 3 月
- 鈴木 瑛之, 藤原 摩耶子, Worata Klinsawat, Wanlop Chutipong, Cécile Sarabian, Marie Sigaud, Vanessa Gris, 村山 美穂 日本国内飼育コツメカワウソの地理的由来の推定および遺伝的多様性の調査 日本 DNA 多型学会第 31 回学術集会 2022 年 11 月
- 善本 智佳, 荒堀 みのり, 松本 悠貴, 村山 美穂 ゲノム解析を用いたダックスフンドの行動に関する遺伝子の探索 日本 DNA 多型学会第 31 回学術集会 2022 年 11 月
- 内藤 アンネグレート素, 鍋島 圭, 佐藤 悠, 村山 美穂絶滅危惧種ニホンイヌワシの主要組織適合複合体(MHC)遺伝子クラス II のロングリード解析 日本 DNA 多型学会第 31 回学術集会 2022 年 11 月
- 亀田 佳代子, 村山 美穂, 中根 理充, 北野 誉 鶉飼いのウミウの性別判別:偏った性比の要因とペアの繁殖行動の意義 日本鳥学会 2022 年度大会 2022 年 11 月
- 伊藤 英之, 小林 宏美, Arne Ludwig, 村山 美穂、マイクロサテライトマーカーを用いたサバンナシマウマの亜種判別 第 28 回日本野生動物医学会大会 2022 年 9 月
- 鈴木 瑛之, 藤原 摩耶子, Worata Klinsawat, Wanlop Chutipong, Cécile Sarabian, Marie Sigaud, Vanessa Gris, 村山 美穂、日本国内飼育コツメカワウソの地理的由来の推定および遺伝的多様性の調査 第 28 回日本野生動物医学会大会 2022 年 9 月
- 寿 秋露, 仁科 国之, 佐々木 哲彦, 村山 美穂, 高岸 治人、オキシトシン受容体遺伝子のメチル化と向社会行動の関連 日本社会心理学会第 63 回大会 2022 年 9 月
- 中村 汐里, 山崎 淳平, 松本 直也, 伊藤 英之, 村山 美穂, 齊 恵元, 木下 こづえ, 山中 正実, 柳川 洋二郎, 佐鹿 万里子, 坪田 敏男, 下鶴 倫人、ヒグマにおける血液 DNA のメチル化率を指標とした年齢推定の試み 第 165 回日本獣医学会 2022 年 9 月

学会等での発表・講演(英語)

- Takuto Sugimoto, Satoshi Hirata Third-party evaluation of humans by horses. 日本動物心理学会第 82 回大会, online. 2022 年 10 月
- Wanyi Lee, Takashi Hayakawa, Mico Kiyono, Naoto Yamabata, Hiroto Enari, Haruka S. Enari, Shiho Fujita, Tatsuro Kawazoe, Takayuki Asai, Toru Oi, Takashi Kondo, Takeharu Uno, Kentaro Seki, Masaki Shimada, Yamato Tsuji, Abdullah Langgeng, Andrew MacIntosh, Katsuya Suzuki, Kazunori Yamada, Kenji Onishi, Masataka Ueno, Kentaro Kubo, Goro Hanya, 17 Diet-related factors strongly shaped the gut microbiota of Japanese macaques. 第 38 回日本霊長類学会大会 2022 年 9 月
- B Mason, B Cervena, L Frias, B Goossens, H Hasegawa, K Keuk, A Langgeng, K Majewski, T Matsumoto, K Matura, R Mendonca, M Okamoto, S Peter, K Petrzalkova, S Sipangkui, Z Xu, B Parfco, Andrew JJ MacIntosh, Novel insight into the strongylid nematodes of South-East and East Asian primates. Primate Society of Great Britain Winter Meeting 2022 年 12 月
- Andrew JJ MacIntosh, Peini Chen, Zhihong XU, Yuka Goto, Christopher F Martin, Rafaela SC Takeshita, Brogan Stewart, Sarah E Turner, Misato Hayashi, Rie Akami, Koshiro Watanuki, Kodzue Kinoshita, Yumi Yamanashi Project Zooentropy: Monitoring Zoo Animal Behavior Through a Lens of Complexity. The 44th Meeting of the American Society of Primatologists 2022 年 8 月
- Peini Chen, Zhihong Xu, Misato Hayashi, Rie Akami, Koshiro Watanuki, Yumi Yamanash, Andrew JJ MacIntosh A preliminary comparison of time budgets and behavior patterns in brown capuchin monkeys (*Sapajus apella*) at Kyoto City Zoo and Japan Monkey Centre. The 67th Primates Conference, 2023 年 2 月
- Andrew JJ MacIntosh The life zooentropic: Leveraging complexity for zoo animal welfare. The 2nd Animal Behavior Twitter Conference 2023 年 1 月
- Qi Luan Lim, Christina Seok Yien Yong, Wei Lun Ng, Ahmad Ismail, Jeffrine J. Rovie-Ryan, Norsyamimi Rosli, Geetha Annavi, Miho Murayama, Population genetic structure of the Malayan tapirs: What do we know so far? . 15TH MALAYSIA INTERNATIONAL GENETICS CONGRESS (MiGC15) 2023 年 3 月
- Akiyuki Suzuki, Worata Klinsawat, Wanlop Chutipong, Cécile Sarabian, Marie Sigaud, Vanessa Gris, Mayako Fujihara, Yumiko Okamoto, Miho Murayama Estimation of the geographic origin of captive small-clawed otters in Japan. ASCM 2022(The 15th International Conference of Asian Society of Conservation Medicine) 2022 年 10 月
- Huiyuan Qi, Nakajima Nobuyoshi, Akio Iwashita, Daijiro Hata, Kodzue Kinoshita, Miho Inoue-Murayama, Age estimation of Tsushima leopard cats based on DNA methylation. ASCM 2022(The 15th International Conference of Asian Society of Conservation Medicine).2022 年 10 月
- Kana Arai, Huiyuan Qi, Miho Inoue-Murayama, Age Prediction for Captive Asian Elephants Using Methylation-Sensitive High-Resolution Melting (MS-HRM). ASCM 2022(The 15th International Conference of Asian Society of Conservation Medicine) 2022 年 10 月
- Akiyuki Suzuki, Mayako Fujihara, Worata Klinsawat, Wanlop Chutipong, Cecile Sarabian, Marie Sigaud, Vanessa Gris, Miho Murayama ESTIMATED GEOGRAPHIC ORIGIN OF SMALL-CLAWED OTTERS KEPT IN JAPAN. 15th IUCN/SSC OSG International Otter Congress 2022 年 9 月
- Annegret M Naito-Liederbach, Yu Sato, Rob Ogden, Miho Murayama, Major histocompatibility complex genes and age are associated with reproduction of the endangered Japanese Golden Eagle in captivity, ConsGen22(European Conservation Genetics Meeting) 2022 年 8 月
- Hiroki Tanaka, Kuniyuki Nishina, Qiulu Shou, Hidehiko Takahashi, Masamichi Sakagami, Tetsuya Matsuda, Miho Inoue-Murayama, Haruto Takagishi, Association of Polymorphism in Arginine-vasopressin Receptor Gene (AVPR1A) with Advantageous Inequity Aversion 第 45 回日本神経科学大会 (NEURO2022) 2022 年 6 月
- Yu Sato, Rob Ogden, Miho Inoue-Murayama, Conservation genomics of golden eagles on isolated populations of Scotland and Japan. ConsGen22(European Conservation Genetics Meeting) 2022 年 8 月
- Michael A Huffman, Plenary lecture: The diversity and convergence of self-medication in the animal kingdom, with

special reference to primates. 17th Chinese Primatological Society Meetings. 2022年7月

Madoka Hattori, Atsuko Saito, Miho Nagasawa, Takefumi Kikusui, Shinya Yamamoto, Comparison of wildcat and domestic cat facial morphology caused by human influence. ABS 2022 (the 2022 annual meeting of the Animal Behavior Society). 2022年8月

Qi Luan Lim, Norsyamimi Rosli, Miho Murayama, Genome-wide runs of homozygosity analysis in six captive Malayan tapirs in Japan. 15th International Conference of Asian Society of Conservation Medicine (oral) 2022年10月

Qi Luan Lim, Norsyamimi Rosli, Miho Murayama, Historical effective population size of the endangered Malayan tapir: Implications for conservation. 58th Annual Meeting of the Association for Tropical Biology and Conservation (poster) 2022年7月

報道

村山 美穂 科学トラベラー「一位のオス 子は少ない？」 読売中高生新聞 2022年7月1日

Hiroto Yoshimura 通信社 SPUTNIK でのインタビュー <https://sputnik.kg/20221204/yaponiyalyk-genetik-hiroto-joshimura-ilim-ak-ilbirs-mack-1070657474.html> 2022年12月4日

幸島観察所 宮崎日日新聞 サル間近「かわいい」幸島で親子連れら観察会 https://www.themiyanichi.co.jp/chiiki/category_9/_67405.html (2022年11月6日に開催した、幸島での一般向けの観察会「幸島ニホンザルの観察会」が報道) 2022年11月11日

幸島観察所 テレビ宮崎 宮崎ニュース 11月6日 18:14 「串間市幸島 野生のニホンザル観察会 イモ洗い行動も」 <https://www.umk.co.jp/news/?date=20221106&id=16384> (2022年11月6日に開催した、幸島での一般向けの観察会「幸島ニホンザルの観察会」が報道)

幸島観察所 NHK ニュース「芋を水で洗って食べる野生のニホンザルが生息する幸島で観察会」

<https://www3.nhk.or.jp/lnews/miyazaki/20221107/5060014061.html> (2022年11月6日開催の幸島での一般向けの観察会「幸島ニホンザルの観察会」が報道) 2022年11月7日

社会貢献

創立125周年記念 アカデミックマルシェへの出展 2022年6月

イベント開催・探究の夏！研究の夏！脳科学者・茂木健一郎が京大の動物博士と考える「サルのふしぎ・ヒトのふしぎ」 2022年7月

イベント開催・公開シンポジウム共催「知りたい！ヤンバルクイナ保全の最前線」 2022年12月

イベント開催・きみもキリン博士になろう！「キリンのわかっていること・わかっていないこと」 2023年1月

三谷 曜子 令和5年度日本水産学会春季大会ミニシンポジウム開催『知床周辺海域のホットスポット形成：海洋環境から高次捕食者まで』

京都大学野生動物研究センター共同利用研究会2022 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター教育関係共同利用拠点・森林フィールド研究コロキウム 2023年2月

第4回動物園水族館大学シンポジウム「動物園・水族館が挑む保全活動」 2023年3月

2022年度共同利用研究会 DNA細胞データベース研究会 性判定技術研修 2023年2月

講演会：日米の動物園・水族館における動物福祉科学 (Zoo and Aquarium Animal Welfare Science in the US and Japan) 2023年3月

中村 美穂 自然科学番組制作 沖縄やんばる 海から陸へオカヤドカリ. NHK ワイルドライフ

17. 共同利用・共同研究拠点

概要

平成22年7月1日付けで、本センターは共同利用・共同研究拠点として以下の認定を受けた。2022年度から6年間(第4期)の継続が承認された。

大学・研究施設名: 京都大学野生動物研究センター

拠点名: 絶滅の危機に瀕する野生動物(大型哺乳類等)の保全に関する研究拠点研究

分野: 野生動物学

期間: 2011年4月～2016年3月(第2期中期目標期間)

2016年4月～2022年3月(第3期中期目標期間)

2022年4月～2028年3月(第4期中期目標期間)

共同利用・共同研究拠点運営委員および共同利用・共同研究拠点計画委員会は4.9を参照

2022年度の活動

今年度も、野生動物や飼育下の動物の基礎研究を推進し、保全や繁殖育成や健康長寿に資する研究を推進した。また、動物園・水族館等との広範な連携体制の構築を目指すと共に、海外調査を基盤に国際的な共同研究の連携体制の構築を図った。

共同利用・共同研究は、例年と同様の枠組みで募集を行った。

・予算配分の有無での採択／実施の件数は以下の通りである。

予算配分のある課題 32件採択 29件実施 (応募35件 3件不採択)

予算配分がなく施設や資料を利用した課題 37件採択 37件実施

予算配分のある課題には35件の応募があり32件を採択した。その後、3件の辞退があり、実施件数は29件だった。予算配分がなく施設や資料を利用した課題は37件(不採択なし)で、37件を実施した。

全体として実施件数は66件で、昨年度と同程度の課題数だった。

・課題別の実施件数は以下の通りである。

課題	新規	継続	総計
1) 野生動物の保全	12	15	27
2) 動物園・水族館での保全	7	7	14
3) ウィズコロナ時代の人と動物	0	0	0
4) 自由研究	10	15	25
総計	29	37	66

1), 2)は例年募集している課題であり、当センターの中心的な研究テーマでもある。

3)は新型コロナウイルスの影響に関する課題で、2021年度に新設したものであるが、本年度は応募がなく実施しなかった。

新規の課題が29件、継続の課題が37件だった。

・研究以外の利用

研究以外の活動は、主に実習やアウトリーチなどの教育・普及活動であり、主に屋久島観察所、幸島観察所を利用したものである。2022年度は5件が実施された。幸島観察所で行われた学生実習1件、屋久島観察所で行われた実習3件、普及活動1件だった。

なお、個別の採択課題とその報告書、関連する業績は野生動物研究センターのホームページに掲載している。

<https://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/cooperative/data.html>

・2022年度採択課題

No	ID	新規・継続	課題分類	申請代表者	所属機関	身分(採択時)	対応者	課題名	配分額
1	A-01	継続	A1) 野生動物の保全	渡邊彩音	名古屋大学	修士課程1年	杉浦	屋久島と種子島におけるヤマモモの分布様式の比較 –ニホンザル絶滅の影響–	¥40,000
2	A-02	新規	A1) 野生動物の保全	関根 彩	岩手大学	学部4年生	村山	ミンクジラ由来の SV40 および変異型 CDK4、サイクリン D、テロメア逆転写酵素を用いた無限分裂細胞の作製	¥80,000
3	A-03	継続	A2) 動物園・水族館での保全	金子武人	岩手大学	准教授	村山	野生動物配偶子バンクの構築および保存配偶子の人工繁殖への応用	¥80,000
4	A-04	新規	A4) 自由研究	木村岳瑠	三重大学	博士前期課程1年	平田	ハンドウイルカにおける報酬や努力に対する不公平忌避の検討	¥157,000
5	A-05	新規	A2) 動物園・水族館での保全	植垣 創士	岐阜大学	学部生4年	木下	動物園動物に対する樹葉サイレージ給与の可能性 ~保存性の観点から~	¥100,000
6	A-06	継続	A2) 動物園・水族館での保全	柏木伸幸	公益財団法人鹿児島市水族館公社	技術職員	木下	ハンドウイルカの簡便な冷蔵、冷凍精液保存の確立(継続)	¥80,000
7	A-07	継続	A2) 動物園・水族館での保全	山田研祐	オリックス水族館(株) 京都水族館	獣医師	三谷	飼育ハンドウイルカにおけるメタボリックシンドローム緩和治療に関する調査	¥119,000
8	A-08	新規	A2) 動物園・水族館での保全	元村 嘉宏	近畿大学院	修士課程1年	三谷	飼育シャチにおける母娘間の社会行動の発達	¥80,000
9	A-09	新規	A2) 動物園・水族館での保全	白形 知佳	新江ノ島水族館	獣医師	木下	飼育下フンボルトペンギンにおける関節疾患罹患率の調査	¥100,000
10	A-10	新規	A1) 野生動物の保全	須崎菜緒	東京農業大学院	博士前期課程2年	木下	3次元加速度計を用いたマレーグアの行動パターンの解明	¥100,000
11	A-11	継続	A1) 野生動物の保全	西川真理	東京大学	客員共同研究員	杉浦	屋久島の森林果実量が農地に現れるヒヨドリ個体数に与える影響	¥120,000
12	A-13	新規	A1) 野生動物の保全	古巻 史穂	北海道大学	博士後期課程2年	三谷	受動的音響手法による北海道根室海峡北部における海棲哺乳類の通年の来遊把握	¥80,000
13	A-15	新規	A4) 自由研究	平田 和葉	京都大学	修士課程2年	杉浦	歯のマイクロウェアを用いた野生ニホンザルの食性調査	¥70,000
14	A-16	新規	A1) 野生動物の保全	村山 夏紀	三重大学	学部4年	三谷	青森県陸奥湾に來遊するカマイルカの年齢段階及び性比に関する研究	¥130,000
15	A-17	継続	A4) 自由研究	土田さやか	中部大学	講師	杉浦	屋久島に生息するシロアリ目昆虫の分布域調査と生態調査、および異種シロアリ同士の朽木共有が成立するプロセスの解明	¥50,000
16	A-18	継続	A4) 自由研究	五百部裕	椋山女学園大学	教授	伊谷	トカラ列島・口之島野生化牛の保全のための社会生態学的調査	¥80,000
17	A-19	新規	A4) 自由研究	西村 大我	近畿大学	修士課程1年	三谷	飼育イルカ成獣における隊列遊泳時の抵抗軽減効果について	¥100,000

18	A-20	継続	A2) 動物園・水族館での保全	宮西 葵	近畿大学農学研究科	博士後期課程 5 年	三谷	飼育ハンドウイルカの当歳児オスにおける社会的性行動の発達	¥80,000
19	A-21	継続	A2) 動物園・水族館での保全	三田 歩	京都大学 霊長類研究所	博士後期課程 1 年	平田	シャチを対象としたベクション(視覚誘導性自己移動感覚)に関する研究	¥100,000
20	A-22	継続	A1) 野生動物の保全	中込 大河	早稲田大学	修士課程 1 年	杉浦	北海道枝幸町におけるオジロワシがウミネコに及ぼす捕食以外の間接的影響の解明	¥80,000
21	A-23	継続	A2) 動物園・水族館での保全	後藤 葉月	北海道大学大学院環境科学院	修士課程 2年	木下	ユキヒョウの高山適応におけるゲノム基盤の解明	¥160,000
22	A-24	継続	A2) 動物園・水族館での保全	荒蒔 祐輔	京都市動物園	係員	伊谷	樹葉給餌における大枝(branch)および小枝(twig)の飼料価値評価によるリユース促進への取り組み	¥106,000
23	A-25	新規	A2) 動物園・水族館での保全	中陳遥香	京都大学	学部 4 年	三谷	海棲哺乳類におけるテロメア長の変動とその要因の解明	¥100,000
24	A-26	新規	A1) 野生動物の保全	河合真美	北海道大学環境科学院	修士課程 1 年	三谷	日本に來遊するシャチ(Orcinus orca)の遺伝的系統解析	¥160,000
25	A-27	新規	A4) 自由研究	田中諒	京都大学大学院理学研究科生物科学専攻動物学系人類進化論研究室	修士課程 1 年	杉浦	嵐山 E 群のニホンザルにおける特異的近接関係の再検討	¥66,000
26	A-28	継続	A1) 野生動物の保全	稲本 俊太	早稲田大学	修士課程 1 年	杉浦	ウミネコの採餌行動における性差と年変動	¥80,000
27	A-29	継続	A1) 野生動物の保全	春日井隆	名古屋港水族館	部長・海洋生物研究センター長	三谷	名古屋港に來遊するスナメリの周年変動	¥100,000
28	A-30	新規	A1) 野生動物の保全	村山 恭平	北海道大学大学院	修士 1 年 (2022 年 4 月)	三谷	北海道東部沿岸域のチシマラッコは、増えていくのか? ~母子の行動に着目して~	¥100,000
29	A-31	新規	A2) 動物園・水族館での保全	太田洋輝	帯広畜産大学	准教授	木下	複数カメラを用いたマルチボディトラッキングによる霊長類の行動分析手法の開発	¥110,000
30	A-32	新規	A1) 野生動物の保全	小川 萌日香	北海道大学	博士後期過程 1 年	三谷	北海道知床海域の海洋生態系における化学汚染物質(PCBs)蓄積濃度の解明	¥80,000
31	B-01	継続	A1) 野生動物の保全	XU Zhihong	Kyoto University	2nd year Doctoral student	杉浦	Sociability and Disease Transmission: Evolutionary Ecology of Parasite transmission in Japanese macaques	
32	B-02	新規	A1) 野生動物の保全	八木 原風	三重大学	博士後期課程	村山	糞中 DNA を用いたメチル化解析によるミナミハンドウイルカの非侵襲的な年齢推定方法の開発	
33	B-03	継続	A4) 自由研究	吉村恒熙	京都大学大学院	博士後期課程 2 回生	村山	アカギツネの行動と遺伝子による自己家畜化仮説の検討	

34	B-04	継続	A4) 自由研究	舟川一穂	京大大学生態学 研究センター	博士課程 1年	鈴木	安定同位体比分析を用いた、ニホンザル野生群における個体レベルでの食性解析
35	B-05	継続	A4) 自由研究	相場慎一郎	北海道大学大学院地球環境 科学研究院	教授	杉浦	屋久島の森林動態
36	B-06	継続	A1) 野生動物の 保全	栗原洋介	静岡大学	特任助教	杉浦	ニホンザルの昆虫食が枯死木分解にあたる影響
37	B-07	継続	A4) 自由研究	揚妻直樹	北海道大学	教授	杉浦	ヤクシカの個体群動態および地域個体群間の遺伝子流動について
38	B-08	継続	A4) 自由研究	田伏良幸	京都大学 大学院理学研究 科 人類進化 論研究室	博士後期 課程 4年	杉浦	社会的伝達に群れの凝集性が与える影響ー休息場所に注目してー
39	B-09	継続	A1) 野生動物の 保全	GARCIA Cécile	CNRS, UMR 7206	Permanent Researcher	鈴木	Flexibility of feeding strategies in primates
40	B-11	継続	A4) 自由研究	李怜柱	京都大学	博士後期 課程 3年	鈴木	野生ウマの社会で母ウマの社会関係が仔ウマの社会性に及ぼす影響
41	B-12	継続	A1) 野生動物の 保全	小野田雄介	京都大学	准教授	杉浦	屋久島における森林の構造や動態に関する研究
42	B-13	継続	A1) 野生動物の 保全	Johnstone Brooks Jackson	Hokkaido University Graduate School of Environmental Science		三谷	Impacts of red tide (Karenia selliformis), kelp distribution, and temperature on sea otter (Enhydra lutris) diet and distribution.
43	B-14	継続	A1) 野生動物の 保全	今野夏季	北海道大学 大学院	修士 1年	三谷	北海道東部沿岸に生息するラッコの分布と風の関係について
44	B-15	継続	A1) 野生動物の 保全	林亮太	日本工営株式会社	研究員	杉浦	屋久島で産卵するアカウミガメに付着する生物の多様性調査
45	B-16	新規	A1) 野生動物の 保全	田中美衣	京都大学	修士課程 1年	杉浦	ニホンザルによる枯死木の破壊
46	B-17	継続	A1) 野生動物の 保全	杉浦秀樹	京都大学	准教授	杉浦	屋久島西部地域における中大型動物の生態調査
47	B-18	新規	A1) 野生動物の 保全	橋戸南美	中部大学	日本学術 振興会特別 研究員	杉浦	ヤクシマダケを採食するニホンザルの腸内細菌研究
48	B-19	新規	A2) 動物園・水族館での 保全	山口さくら	東京農業大学	博士前期 課程 2年	木下	飼育下アジアゾウと飼育員の絆形成におけるトレーニングの有効性ーホルモン濃度との関係に注目してー
49	B-20	新規	A1) 野生動物の 保全	Katherine Majewski	Kyoto University WRC	Research Student	杉浦	Latrine surveys and monitoring for predation and disease spread by invasive raccoon dogs (Nyctereutes procyonoides) on Yakushima island

50	B-21	新規	A4) 自由研究	平安 恒幸	金沢大学	准教授	平田	霊長類に特有な免疫レセプターの遺伝的多様性に関する研究
51	B-22	継続	A4) 自由研究	鈴木滋	龍谷大学	教授	杉浦	野生ニホンザル社会のエングラムによる地域間比較
52	B-24	継続	A4) 自由研究	澤田晶子	京都大学	特任研究員	杉浦	ニホンザルの菌食行動
53	B-26	新規	A1) 野生動物の保全	西本千夏	北里大学	学部4年	村山	ネコとイヌの卵巢を用いた卵子と卵母細胞の凍結保存と体外成熟の技術向上
54	B-27	新規	A4) 自由研究	KIM Jaock	Graduate School of Science	A 1st grade of master's student	杉浦	How do annual variations in the fruit and seed availability influence to sexual behavior in Japanese macaques in Yakushima?
55	B-28	新規	A2) 動物園・水族館での保全	田坂 樹里	横浜市環境創造局動物園課繁殖センター	横浜市技術職員獣医師	藤原	動物園飼育動物の原子卵胞の凍結保存について
56	B-30	新規	A4) 自由研究	角田史也	京都大学野生動物研究センター	技術補佐員	杉浦	ヤクシマザルの花蜜食行動がヤブツバキの繁殖に与える影響
57	B-31	新規	A4) 自由研究	Julien Paulet	Universite Jean Monnet、フランス (CICASP インターン生、WRC 受入れ)	修士課程2年	鈴村	ニホンザルの自動個体識別・自動トラッキング技術の構築および社会ネットワーク分析
58	B-32	継続	A4) 自由研究	井上漱太	名古屋大学	学振特別研究員	鈴村	ドローンを用いた空中映像からニホンザルの視野を追跡する
59	B-33	新規	A4) 自由研究	Christen Lin	京都大学	大学院生	森村	Examining emotional contagion in chimpanzees via a cognitive bias touch screen task
60	B-34	継続	A4) 自由研究	Piao Yige	京都大学	大学院生	森村	Investigation of social learning mechanisms in bonobos and chimpanzees: comparative cognitive study on social intelligence underpinning culture
61	B-35	継続	A4) 自由研究	Lee Sok Hwan	京都大学	大学院生	森村	社会的地位の進化に関する比較認知研究
62	B-36	継続	A4) 自由研究	James Brooks	京都大学	大学院生	森村	オキシトシンが集団内・集団間関係におよぼす影響に関する生理認知行動学的実験
63	B-37	継続	A4) 自由研究	大西絵奈	京都大学	大学院生	森村	飼育チンパンジーにおける排尿同期現象
64	B-38	新規	A4) 自由研究	松本卓也	信州大学	准教授	森村	ミリ波レーダを用いて非接触でチンパンジーの心拍数を計測する手法の開発
65	B-39	継続	A1) 野生動物の保全	金森朝子	総合研究大学	研究員	杉浦	野生オランウータンの生息密度調査

66	B-40	継続	A1) 野生動物の保全	蔦谷 匠	総合研究大学	助教	杉浦	野生オランウータンの食性分析
67	C-01	継続	B) 教育・普及	鈴木滋	龍谷大学	教授	杉浦	龍谷大学国際学部国際文化実践ⅡD(屋久島の人と自然)
68	C-02	新規	B) 教育・普及	赤見理恵	公益財団法人 日本モンキー センター	キュレーター	伊谷	モンキーキャンパス屋久島研修ツアー
69	C-03	継続	B) 教育・普及	杉浦秀樹	京都大学	准教授	杉浦	屋久島学ソサエティの参加・運営
70	C-04	新規	B) 教育・普及	杉浦秀樹	京都大学	准教授	杉浦	屋久島実習:屋久島沿岸に来る鯨類の観察の試みとヤクシマザルの観察
71	C-05	継続	B) 教育・普及	杉浦秀樹	京都大学	准教授	鈴木	幸島実習

18. 野生動物研究センター 企業連携・情報発信事業

① 情報発信

1) SNS (twitter)

センターのイベント、ニュース、研究成果、研究の様子などを WRC の公式 twitter で発信した。詳細は下記 URL の通りである。(https://twitter.com/WRC_KyotoUniv)

2) ニュースレター

教員・学生・卒業生が自身の研究について紹介するニュースレターを月1～2回のペースで刊行した。詳細は下記 URL の通りである。(http://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/news-letter.html)

(協力: 電通株式会社)

3) 公式 YouTube にて動画配信

動物園・水族館大学の記録動画や掲載論文の紹介映像の公開を開始した。詳細は下記 URL の通りである。(https://www.youtube.com/channel/UCv8bhV6SzEjHizKKFyRFxhQ)

② 企業連携

2021 年度に実施した小学生向けイベント「動物のわかっていること・わかっていないこと」の内容をもとに、小学館プロダクション(ShoPro)、電通株式会社との連携による、動物の「不思議」を解き明かす研究の面白さを伝える内容の教育絵本「どうぶつのわかっていること・わかっていないこと」の作成を行った。

小学館集英社プロダクションより 2022 年 7 月に出版され、収益の一部が WRC に寄付される。

<https://www.wrc.kyoto-u.ac.jp/books/picbook/index.html>

